# 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報

1985年度

1986年3月

柏原市教育委員会

### はしがき

柏原市は大阪の東部に位置し、奈良県との境を限る生駒山系の懐にいだかれた緑多い街です。近年、大阪の衛星都市として発展、人口が増加し、こうした自然も次第に失なわれつつありますが、大都市周辺にあって緑濃い山々と大和川、石川に代表される豊富な水に恵まれた地域として、申し分のない住環境を備えています。

また、柏原市域は古くから繁栄、人々の往来の賑やかな一帯でもありました。その足跡は旧石器時代からみられ、現代日本文化の基盤ともいうべき稲作が伝来した弥生時代には、極めて早い時期から人々が定住していました。さらに、単一市町村としては古墳の数は全国一を誇っています。国家としての体制が整った飛鳥、奈良時代には、河内国府の近くにあって、河内国の中心地域として多くの街道が交錯し、寺院、宮殿が数多く設けられていました。時代は降りますが、江戸時代の大和川付替え工事は、当時の土木技術の最高水準の結集によって始めてなしえたものです。このように柏原市は永々と続く人々の営みの上に築かれた歴史の街、文化都市でもあります。

市民憲章には「自然の美を生かし、住みよいまちをつくります。「文化遺産に学び、未来に生きる力をのばします。とうたわれています。宅地開発が進み、大規模な土木工事の槌音があちこちで聞かれる今日、市民憲章を尊び、現在残る自然と文化遺産の保存を急務の重要課題としながら、未来の柏原を考えていくことこそ、市民としての私達の努めでありましょう。本書はこうした努力の成果の一つであり、多くの方々に御活用いただき、今後とも文化財保護に御援助、御理解を賜わりたく祈念するものです。

昭和61年3月

- 1. 本書は、柏原市教育委員会が国庫補助事業 (総額 8,000,000円、国補助率 50%、府補助率 25%、市負担率 25%)として計画し、社会教育課文化財担当が実施した、柏原市内遺跡群緊急発掘調査概要報告書である。
- 2. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 竹下 賢、北野 重、安村俊史、田中久雄、桑野 一幸を担当者とし、昭和60年4月1日に着手し、昭和61年3月31日をもって終了した。
- 3. 本書には、文化財保護法第57条の2に基づく、届出があった195件のうち、昭和60年1月 1日から12月31日までに着手した、土木工事等に伴う事前発掘調査の概要を記載している。
- 4.調査の実施と整理には以下の諸氏の参加、協力を得た。

石田成年 谷口京子 仲井光代 秋田大介 伊藤芳匡 稲岡利彦 西村 威 松下 修 麻 栄三郎 朝田行雄 今中太郎 清龍健二 井上岩次郎 奥野 清 川端長三郎 谷口鉄治 西岡武重 分才春信 竹下彰子 道籏甚蔵 森口喜信 山田貞一 山本芳一 江波佐知子 飯村邦子 中田ゆかり 藤本直美 福本理香 松村富子 竹下真紀 村口ゆき子 横関勢津子 吉居豊子 乃一敏惠 松成早苗 藪中優香 森本(旧姓 中井)節子 中尾佳代子 小走有美 裏山弥太郎 (順不同)

- 5. 本書の監修は竹下 賢が担当した。
- 6. 茶臼塚古墳の調査にあたっては、帝塚山短期大学 山本 昭、田代克己両氏の御指導を得た。記して感謝の意を表します。
- 7. 本書で使用した方位は磁北、標高はT.P.である。
- 8. 本調査にあたっては、写真、実測図などを記録として残すと共に、カラースライド、ビデオテープを作製した。広く利用されることを願うものである。また、出土した遺物は、写真、 実測図と共に当市教育委員会、歴史資料館にて保管、展示を行なっている。

はしがき

例 言

1985	年度柏原市内遺跡群発掘調査一覧(国庫補助事業)
1985	年度柏原市内遺跡群発掘調査位置図(1),(2)
1985	年度柏原市内遺跡群立会調査一覧
I	平野遺跡85-1次調査 1
II	原山廃寺85—1 次調査・・・・・・・・・3
III	松岳山古墳群85—1次調査
	茶臼塚古墳(85-1次調査)・・・・・19
付	章
1.	<sup>平</sup> 船橋遺跡······9]
2.	本郷遺跡94

3. 松岳山古墳群の被葬者集団 (山本 昭)…………98

### 1985年度 柏原市内遺跡群発掘調査一覧

(国庫補助事業)

#### 柏原地区

遺跡名	所	在	地	面積m²	申;	青 者	用	途	担当	調査期日	備	考
平野	平野2丁目476-12		100.0	上村	和彦	個人住	宅建設	北野	10.19~10.21	本書 1ページ。		
85—1												
大県南	太平寺2	2丁目5	47-8	282.61	松岡	茂	"		"	10.18	GL-2.4 m まで。 遺構・遺物なし。	位置図
85— 2										,	(1).	IL   IL   IL   IL   IL   IL   IL   IL
家原寺 跡	安堂町(	639、6	40	203.28	中村	忠雄	"		"	4.1	近世の南北方向 出。陶磁器類少量	
85—1											置図(1)。	

#### 国分地区

玉手山 85-2	玉手町145-165	967.95	八幸産業(株)	分譲住宅建設	田中	9.4	GL-1mまで盛土。一部でGL -20cmで地山。位置図(2)。
原山	旭ヶ丘3-1077-1	297.08	永井 廉章	個人住宅建設	北野	2.1~2.5	本書 3 ページ。
85—1							
田辺	国分本町6丁目	360.73	乾 利男	"	田中	7.8	GL-40cmで地山。遺構・遺物
85—1	143-1、1444						なし。位置図(2)。
松岳山 古墳群 85-1	国分1655	400.0	裏山弥太郎	範囲確認調査	竹下	7.17~8.25	本書19ページ。
誉田山 古墳群 85-1	旭ヶ丘4丁目4986 -171	1687.53	木下 秀夫	テニスコート 造成	田中	3.11	すでに削平を受けている。 大阪層群が表土下にみられ る。位置図(2)。
河内国 分尼寺 85—1	国分東条町2579-2	688.14	安尾 公一	個人住宅建設	安村	8.28	GL-1.2mまで掘削。すべて 耕作土。 遺構・遺物なし。 位 置図(2)。

#### 表---1

この一覧表には昭和60年度の国庫補助事業として計画、実施した発掘調査のうち、昭和60年 1月1日~12月31日の間に着手したものを掲載している。

本年度の国庫補助事業による発掘調査、立会調査の件数は、昨年度とほぼ同数であった。また、それぞれ国分地区が柏原地区を上回っている。これは、柏原市域における開発の地域的動向をある程度反映しているものと考えられる。

調査位置については表中に示す当該ページ、位置図(1)、(2)を参照されたい。

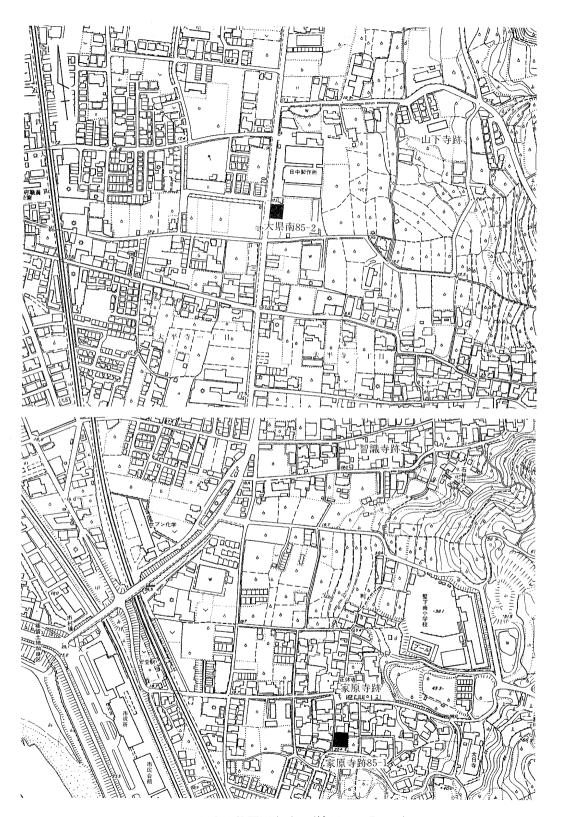


図-1 調査地位置図(1) (縮尺5000分の1)

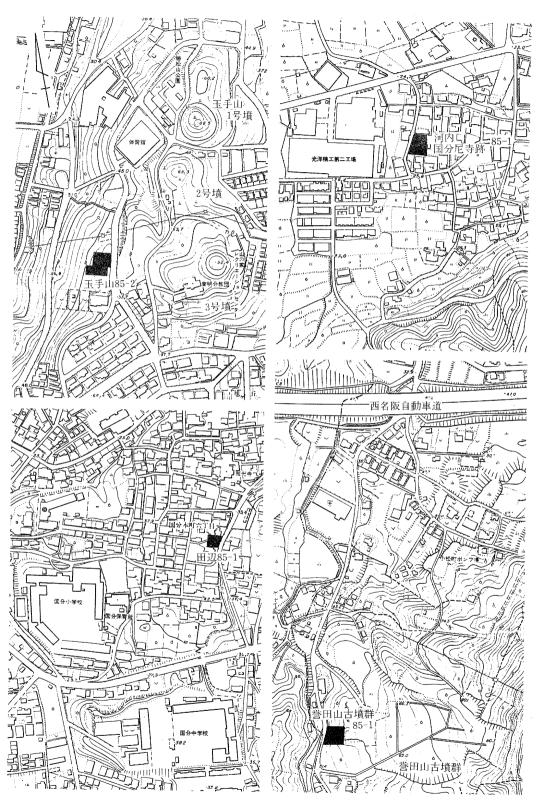


図-2 調査地位置図(2) (縮尺5000分の1)

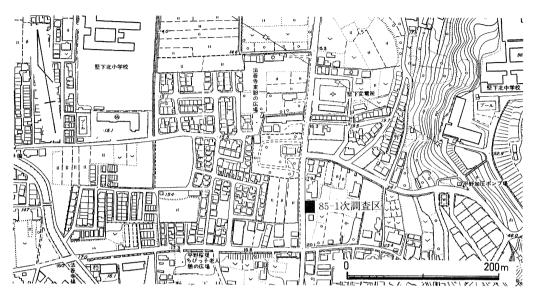
## 1985年度 柏原市内遺跡群立会調査一覧

#### 柏原地区

区						
所 在 地	面積m²	申請者	用 途	担当	調査期日	備考
大正2丁目1-4	2269.0	日本電信電 話公社	事務舎増築	田中	5.10	柏数文59.3-45。遺物・遺構 なし。GL-70㎝盛土
大 正3丁 目386-31、 386-11の一部	197.0	北口一好	個人住宅建設	桑野	12.6	柏教文60.3-67。遺物・遺構なし。GL-50cm盛土。
本郷3丁目791-4、11 の一部	185.0	㈱吉野工務店	長屋建住宅建 設	桑野	3.22	柏教文60.3-6。GL-1.5cm灰 色粘土層。土師器小片含む。
本郷2丁目907-1	648.0	㈱大谷住宅	個人住宅建設	田中	9.3	柏教文60.3-51。遺物・遺構 なし。GL-1.7m盛土。
本郷3丁目777-13	59.0	清川 勇	"	"	9.9	柏教文60.3-34。遺物・遺構なし。 GL-80cm盛土。以下砂層。
本郷3丁目789-4	681.0	㈱カワチ	倉庫・事務所 建設	桑野	11.15	柏教文60.3-64。遺物・遺構 なし。
本郷5丁目222-1	2735.0	㈱イカワ商工	宅地造成	"	11.26	柏教文60.3-54。 本書94ページ。
平野1丁目7	144.0	川崎一市	個人住宅建設	田中	3.12	柏教文60.3-5。遺物・遺構な し。
太平寺1丁目144-1~ 2丁目547-3	440.0	柏原市水道局	上水道管布設	"	5.11	柏教文60.3-15。遺物・遺構 なし。
大県3丁目506-6、507 -4	380.0	前田繁太郎	個人住宅建設	"	5.22	柏教文60.3-14。GL-1.9m 以下古墳時代の包含層。
大県3丁目344-10	107.0	谷口富子	個人住宅建設	"	9.5	柏教文60.3-49。遺物・遺構 なし。GL-1.6m砂層
安堂町962	498.0	中辻繁太郎	共同住宅建設	"	2.18	柏教文60.3-13。遺物・遺構 なし。GL-1.5m盛土。
安堂町930-7	150.0	杉本 禎子	"	北野	10.17	柏教文60.3-41。遺物・遺構 なし。GL-1.2m盛土。
太平寺1丁目136-1	615.0	谷口信一	"	桑野	11.16	柏教文60.3-57。遺物・遺構 なし。GL-1.6m地山。
高井田1128	2000.0	高井田区長	下田池改修工 事	安村	12.25	柏教文60.3-75。遺物・遺構 なし。
青谷2140	165.0	峯田 義詮	庫裡改築	桑野	4.2	柏教文60.3-9。遺物・遺構な し。
雁多尾畑5975-4	180.0	山本 三男	個人住宅建設	田中	5.8	柏教文60.3-32。遺物・遺構 なし。GL-30cm盛土。
高井田64-2、65-7	299.0	谷口真人	"	"	10.7	柏教文60.3-44。遺物・遺構 なし。
雁多尾畑4431	791.0	横尾実行組合	出荷場建設	桑野	12.10	柏教文60.3-60。遺物・遺構 なし。GL-1.2m盛土。
区				<u> </u>		
旭ヶ丘1丁目508	113.0	伴 正治	個人住宅建設	田中	2.6	柏教文60.3-4。遺物・遺構な し。GL-40cm盛土。
片山町213-2	282.0	玉木 勲	. "	"	2.8~2.9	柏教文60.3-11。遺物・遺構 なし。
旭ヶ丘2丁目293-22	261.0	森田マツ	n	桑野	3.20	柏教文60.3-24。遺物・遺構 なし。
片山町14-49	130.0	山田博通	"	田中	4.25	柏教文60.3-29。遺物・遺構 なし。GL-70cm盛土。
円明町1000-16、17	5171.0	株式会社 丸神鉄工所	事務所建設	"	4.2	柏教文59.3-32。遺物・遺構 なし。GL-50cmで地山。
	所 在 地 大正2丁目1-4 大正3丁目386-31、 386-11の一部 本郷3丁目791-4、11 の一部 本郷3丁目777-13 本郷3丁目789-4 本郷3丁目789-4 本郷5丁目222-1 平野1丁目7 太平寺1丁目144-1~ 2丁目547-3 大県3丁目344-10 安堂町962 安堂町930-7 太平寺1丁目136-1 高井田1128 青谷2140 雁多尾畑4431  区 旭ヶ丘1丁目508 片山町213-2 地ヶ丘2丁目293-22 片山町14-49	所 在 地 両積m 大正2丁目1-4 2269.0  大正3丁目386-31、386-11の一部 4郷3丁目791-4、11 185.0 の一部	所 在 地 面積 中 請 者 大正2丁目1-4 2269.0 日本電信電 話公社 大正3丁目386-31、386-11の一部 本郷3丁目791-4、11 185.0 株吉野工務店 の一部 本郷3丁目777-13 59.0 清川 勇 本郷3丁目789-4 681.0 株カワチ 本郷5丁目222-1 2735.0 株イカワ商工 平野1丁目7 144.0 川崎一市 太平寺1丁目144-1~ 2丁目547-3 380.0 前田繁太郎 -4 大県3丁目344-10 107.0 谷口富子 安堂町962 498.0 中辻繁太郎 安堂町930-7 150.0 杉本 禎子 太平寺1丁目136-1 615.0 谷口信一 高井田1128 2000.0 高井田区長 青谷2140 165.0 峯田義詮 雁多尾畑5975-4 180.0 山本三男 高井田64-2、65-7 299.0 谷口真人 雁多尾畑4431 791.0 株尾実行組合 区 区 地ヶ丘1丁目508 113.0 伴 正治 片山町213-2 282.0 玉木 勲 地ヶ丘2丁目293-22 261.0 森田マツ 片山町14-49 130.0 山田博通	所 在 地 面積m 申 請 者 用 途	所 在 地 面積m 申 請 者 用 途 担当	所在地の極端         地方記者         用途 等務合増築         担当 調査期日           大正3丁目1-4         2269.0 目本電信電 事務合増築 話公社

遺跡名	所 在 地	面積m²	申請者	用 途	担当	調査期日	備考
玉手山	旭ヶ丘2丁目376-17	190.0	井上興二	個人住宅建設	田中	5.21	柏教文60.3-33。遺物・遺構 なし。GL-20cmで地山。
"	円明町217-70	2679.0	日本マルコー 株式会社	擁壁工事	"	6.1	柏教文60.3-7。遺物・遺構な し。GL-3m盛土。
"	旭ヶ丘1丁目442-1・ 2、443、444	1869.0	平川住宅 株式会社	宅地造成	"	6.15	柏教文60.3-43。遺物・遺構 なし。
"	玉手町115-177	121.0	八幸産業 株式会社	個人住宅建設	"	6.19	柏教文60.3-39。遺物・遺構 なし。
"	玉手町115-146	121.0	清水明彦	"	"	"	柏教文60.3-38。遺物・遺構 なし。
"	旭ヶ丘1丁目562-1・ 2、564-4	530.0	畑本 昭一	. "	"	7.11	柏教文60.3-2。遺物・遺構な し。GL-90cm盛土。
"	片山町72-6	280.0	常岡恒夫	"	"	7.26	柏教文60.3-28。遺物・遺構 なし。
"	旭ヶ丘2丁目371-8	174.0	安田建設工業 株式会社	"	安村	8.23	柏教文60.3-45。遺物・遺構 なし。GL-1m盛土。
"	旭ヶ丘2丁目371-8・ 23	169.0	"	"	"	"	柏教文60.3-46。遺物・遺構 なし。GL-1m盛土。
"	玉手町364-2	332.0	西村 徹	"	竹下	10.22	柏教文60.3-55。遺物・遺構 なし。
"	円明町1064-3	561.0	国分化学工業 株式会社	社屋建設	桑野	11.14	柏教文60.3-61。遺物・遺構 なし。GL-1.5m盛土。
"	旭ヶ丘1丁目14-21	259.0	川本春雄	個人住宅建設	"	12.3	柏教文60.3-58。遺物・遺構 なし。
玉手山 古墳群	玉手町115-133	99.0	阿部久明	"	田中	2.22	柏教文60.3-46。遺物・遺構 なし。GL-60cm盛土。
"	円明町1000-20	867.0	株式会社 富士 プリント製作所	工場建設	"	2.25	柏教文60.3-16。遺物・遺構 なし。GL-1m盛土。
"	旭ヶ丘1丁目390-75	327.0	学校法人 古武学園	個人住宅建設	"	5.20	柏教文60.3-31。遺物・遺構 なし。GL-40cmで地山。
"	旭ヶ丘1丁目390-75	443.0	"	"	"	5.20	柏教文60.3-35。遺物・遺構 なし。GL-80cm盛土。
田辺	国分本町6丁目1458	60.0	横山宗治	"	"	1.12	柏教文59.3-38。遺物・遺構 なし。
"	国分本町6丁目1458	112.0	横山龍治	"	"	5.22	柏教文59.3-43。遺物・遺構 なし。GL-60cm盛土。
原山	旭ヶ丘3丁目1066-1	271.0	高次征次	"	"	9.14	柏教文60.3-48。遺物・遺構 なし。GL-50cm盛土。
国分尼寺跡	国分東条町2974-6	100.0	檀野隆一	"	"	1.19	柏教文59.3-40。遺物・遺構 なし。GL-1.4m盛土。

### 平 野 遺 跡



図一3 平野遺跡調査地位置図

#### 85-1 次調査

·調查地区所在地 柏原市平野2丁目476—13

·調查担当者 北野 重

·調査期間 1985年10月20日~10月21日

・調査面積 2 m²/100.00 m²

平野遺跡は、柏原市平野に所在する遺跡である。立地は、生駒山地西麓の緩斜面地から北流 していた旧大和川の河道跡までの狭小な範囲に所在する。生駒山地から派生する尾根や開折谷 によって小さな扇状地が形成されている。調査区の位置する場所は、大県遺跡の北側扇状地の 一部を占めその北西端にあたる。調査区の南東に向かって軽い上り坂となり、反対に北西方向へ 徐々に下っている。遺跡の性格は、弥生時代から古墳時代、奈良時代の複合集落遺跡である。

今回の調査は、個人住宅の建築に先立つ発掘調査で、遺跡深度が深い事が予想される為1×2mのトレンチ調査を実施した。深度は、2.5mまで掘削した。

トレンチ断面の土層観察は次の通りである。

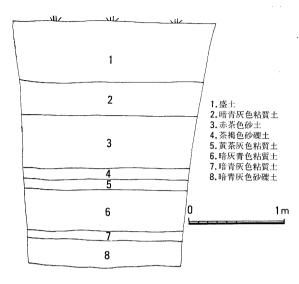
現地表から70cmが盛土である。 2 層は、暗青灰色粘質土の旧耕作土である。厚さ約35cm。 3 層は、赤茶色砂土で洪水による堆積と思われる。土層中に非常に多くの水流があり今回の調査の目的であった弥生時代の包含層までの掘削を中止せざるを得ない原因ともなった。この層ま

#### 平 野 遺 跡

ではほとんど遺物を含んでいない。

4層は、茶褐色砂礫土である。非常に堅い土層で、5 cm位までの砂礫を多く含んでいる。厚さ約12cm。遺物は摩耗の激しい細片が少量出土した。5層は、黄茶灰色粘質土で無遺物層である。厚さは4層と同じ位である。

6層は、暗灰青色砂礫土である。こぶし大から人頭大までの自然礫を下層になるにしたがい多くを含んでいる。 遺物は、須恵器や土師器が出土した。 時期は6世紀末から7世紀初頭までである。(図-5、2、3)



図一4 トレンチ土層図

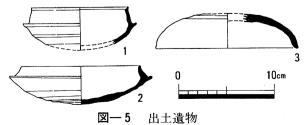
7層は、暗青灰色粘質土である。ややシルト質を呈し、遺物を含まない。厚さ約10cmを測る。 8層は、暗青灰色砂礫土である。この土層も6層と同様に多くの砂礫を含んでいる。特に30 cm以上のものが多い。遺物は須恵器や土師器が出土した。土師器は細片のものが多い。時期は、 5世紀末から6世紀初頭の遺物(図一5、1)包含層であろう。

出土遺物は、6世紀前後と7世紀前後の時期の遺物がある。須恵器は、甕、杯、土師器は、土釜の口縁、杯の底部、高杯の脚部等があるが、いずれも小片の為、ここでは、須恵器杯の蓋と身三点のみ図化した。1、2は須恵器の杯身。1は6世紀初頭のもので立ちあがりは長く、口縁端部内面に段を持つ。色調は暗青灰色を呈し、胎土は、1㎜内外の白色砂粒を比較的多く含む。焼成はきわめて良好である。復元口径10.2cmと割合小型化した時期のものである。作りは割合丁寧である。2は、6層から出土したものでほぼ完形である。立ちあがりは短く内傾気味である。灰白色を呈し、胎土は1㎜内外の白色砂粒を多く含む。焼成は良好である。仕上は丁寧。口径12.6cm、器高4.0cm。内面中央部に平行叩きの当て板痕がみられる。底部のヘラ削りはやや雑に底部半分位まで行なっている。6世紀後半頃に含まれるであろう。

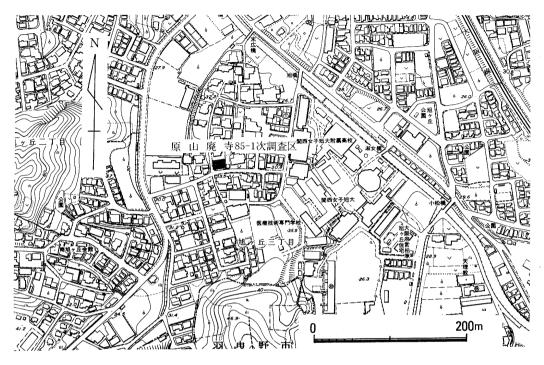
3は、6層から出土した須恵器の杯蓋である。稜は消失し、全体に丸味を持つ。調整も雑である。白青灰色を呈し胎土は砂粒を多

く含む。焼成良好。復元口径14.8cm。

2、3はいずれも内面より外面体部 中頃まで回転ナデ、それより底部ある いは天井部にかけては回転へラ削りを おこなっている。



# 原山廃寺



図一6 原山廃寺調査地位置図

#### 85-1 次調査

・調査地区所在地 柏原市旭ヶ丘3丁目1077-1

·調査担当者 北野 重

・調査期間 1985年2月1日~2月5日

·調査面積 30 m²/297.08 m²

#### 調查概要

当地は、古くから奈良時代の瓦が散布し、昭和20年代までに塔跡基壇が遺っていて、また構 堂跡と推定される場所には自然石の礎石も存在したという場所にあたり法隆寺式伽藍配置の寺 院跡と考えられている。この寺跡は、『日本霊異記下巻第五』に「河内国安宿郡部内、有信天原山 寺……」とある原山寺を呼称している。背景となる氏族については明確な資料はなく、今後 の考古学的資料の増加を待たねばならない。

今回の調査は、原山廃寺の寺域内にあたり、個人住宅建設に際して実施した発掘調査である。 住宅建築場所にトレンチを設定したが、中世の遺物包含層と溝、寺院廃絶後の瓦溜りを検出した

#### 原山廃寺

のみで、寺院に関わる明確な遺構については検出されなかった。

#### 出土遺物

遺物は、遺物包含層と瓦溜りから、瓦を主にし、若干の土師器、須恵器、磁器、石器等が出土した。実測しうるものについて説明を加えたい。

#### 軒丸瓦(図一7)

当調査地から出土した軒丸瓦は3点である。いずれも瓦溜りから出土した。

1は、単弁7葉蓮華文軒丸瓦である。直径18.3cm、中房は径5.5cmと大きく内に1+8の蓮子を配する。各弁は凸線で縁取られ模様は鮮明である。弁間には珠文が置かれる。瓦当と丸瓦の接合方法は、溝にはめ込み式でその上下に粘土を補充したものと考えられる。焼成はやや不良で瓦質状を呈す。色調は灰黒色、胎土は石英、長石、くさり礫等の1~2mm砂粒を多く含む。同形式の瓦当は、当原山廃寺から北方へ1.5km離れた高井田廃寺と西南へ200m離れた五十村廃寺から出土している。

2は、複弁7葉蓮華文軒丸瓦である。直径17.8cmを測る。中房は最も大きく約5.9cmを測り5 mm位の高まりを持っている。内に1+8+12の蓮子を配している。弁は細い凸線で輪郭され、子葉は高く短い。周縁は直立内斜線で段違いの鋸歯文を付ける。焼成は甘く土師質である。色調は茶褐色を呈し、胎土は石英、長石、くさり礫の2cm前後砂粒を多く含む。瓦当と丸瓦の接合方法は、1と同様と考えられる。この形式の意匠を持つ軒丸瓦は3種を数え、中房、弁、周縁に違いがみられる。高井田廃寺と五十村廃寺に同形式のものが出土する。

3は、複弁8葉蓮華文軒瓦である。直径17.2cm。中房はやや大きく高さはほとんどなく、内に蓮子の1+4+8を配す。子葉は細くて長い感じを与える。横断面からみると、頂部を板状のもので押えられ低い平坦面を持つようになり、放物線を成さず台形状になっている。このような形式のものか2次的に偶然成ったものか1個体だけなので詳かでない。今後の出土例を待ちたい。子葉間には細い凸線が巡り区画している。周縁は直立高縁を呈しさほど高くない。瓦当と丸瓦の接合方法は、溝を掘り挿入後上下に粘土を被せて補強する。色調は明灰青色。胎土は、石英、長石1~3mmの砂粒を多く含む。焼成は須恵質で堅緻である。従来から原山廃寺式と称されている形式の軒丸瓦と同形式で、中房径がわずかに小さいものである。

図版番号	直径	内									
		弁 区		中房		<u>+=</u>	形態	文様		音々	瓦当厚
		蓮弁の形式	弁幅	径	蓮子数	幅	形態	人惊		高さ	
1	18.3	単弁(単子葉)7葉	3.6	5.5	1+8	1.3	平坦縁	素	文	0.8	1.8
2	17.8	複弁(単子葉)7葉	3.7	5.9	1+8+12	1.7	傾斜縁	段違い	鋸歯文	1.2	3.4
3	17.2	複弁(単子葉)8葉	3.6	5.1	1+4+8	1.4	平坦縁	素	文	1.2	3.1

表一3 軒丸瓦法量表 単位はc.g.s

#### 平瓦 (図-8)

平瓦片がコンテナ10箱分出土した。瓦溜りから出土したものが多く他の地点から出土したものは少量である。全部細片で全形を知り得るものは無く、平瓦裏面に施こされた叩きの模様によって若干の説明を加えたい。

I 類は、凸面に格子叩きを施こす。格子は菱形を呈し、 $13 \times 3.6 \sim 4.2$ cmの大きさを測る。叩きの原体は真横に叩き菱形の長辺が瓦の側面に平行している。格子目叩きを施した後一部ナデ消している。凹面は布目痕がのこり模骨痕がみられる。布目密度は、 $8 \sim 10$ 条/cmである。模骨幅は5cm位を測る。色調は、青灰色、胎土は、 $1 \sim 4$ mm砂粒を多く含み、焼成は、須恵質で堅緻である。製作は、桶巻作りと考えられる。

II類は、凸面に有軸の綾杉文叩きを施す。叩き中心軸は下端に平行する。綾杉文の種類はこの他に、太い有軸を持つもの(b)、無軸のもの(c)がある。叩き目のない部分はきれいにナデ調整である。凹面は布目と模骨痕がみられ、それぞれ8条/cm、2.8~3.0cmを測る。色調は、薄茶灰色。胎土は、石英、くさり礫を少し含み割合甘い焼成のものが多い。(b)や(c)の焼成は良好のものが多く須恵質で堅緻である。製作は、桶巻作りである。

Ⅲ類は、凸面に縄叩きを施した後に太い有軸の綾杉文叩きを施こすものである。綾杉文の原体はほとんど横位であるが、縄目に対して斜めを成す。この他に、縄叩き後に縄目と直交する太い綾杉叩きを施こしてかつ縄目を雑なナデ調整で施こすもの(b)がある。前者は薄く、後者は厚い感じのものが多い。凹面は布目と模骨痕がみられる。 9条/cm。色調は、灰白色。胎土は、石英、くさり礫を含み1~2m砂粒が若干みられる。焼成は須恵質の生焼けという感じで甘く、摩耗が激しい。製作は、桶巻きと考えられる。

Ⅳ類、凸面に縄叩きを全面に施こしたもので、縦方向に一定している。凹面は布目があり8条/cmを数える。また、布目の中に赤褐色の朱が痕り、端部から11.6cmのところまで存在が確認される。側面は、凸面に対し鈍角を成すようにヘラ切りし、凹面端部を2cm前後の幅でヘラ切り調整をしている。色調は、灰褐色(一部黒灰色を呈す)で、胎土は、1mm以下と3mm前後の砂粒を少し含む。焼成はやや甘く須恵質の中間位のものである。製作は、一枚作りである。この他に、縄叩きが横位に施されたもの(b)もある。これは、須恵質で雑な作りのものが多い。

V類は、Ⅳ類と同様縄目叩きであるが、縄の単位が極単に大きいものである。凹面は布目がある。側面は2回へラ切りを行ない、くの字形になっている。凹面側は部分的に軽いへラ切りする。色調は、灰茶色、胎土は、石英、長石、雲母を含み、1~3 mm砂粒を多く含む。焼成は甘い。製作は、一枚作りと考えられる。

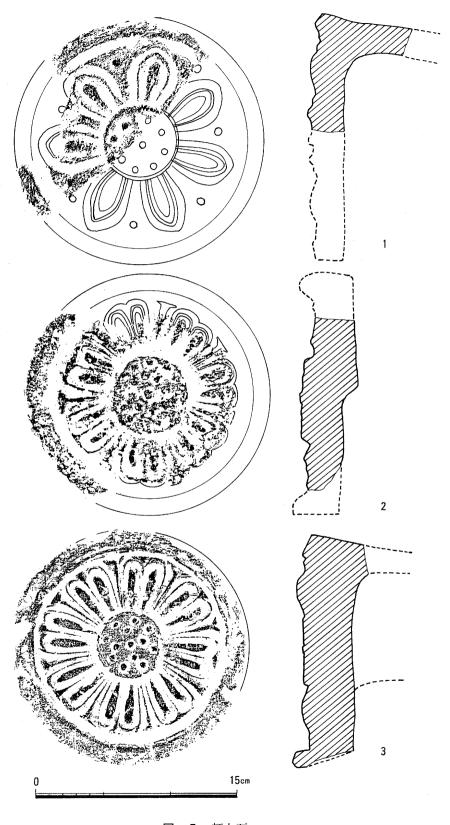
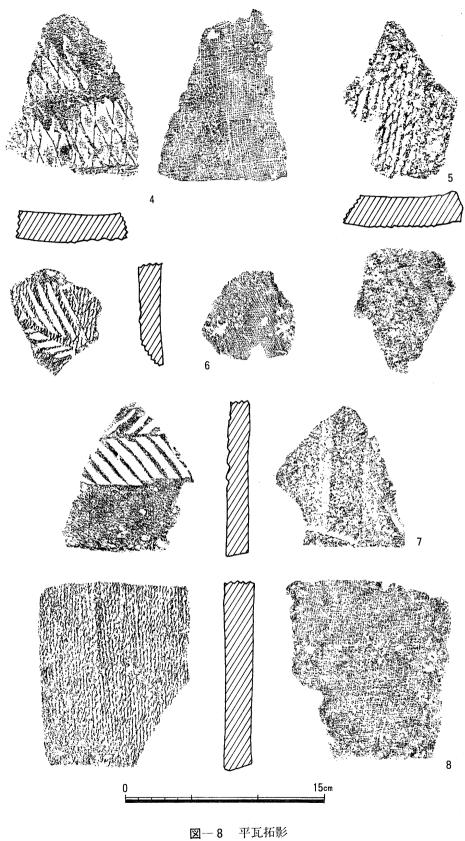
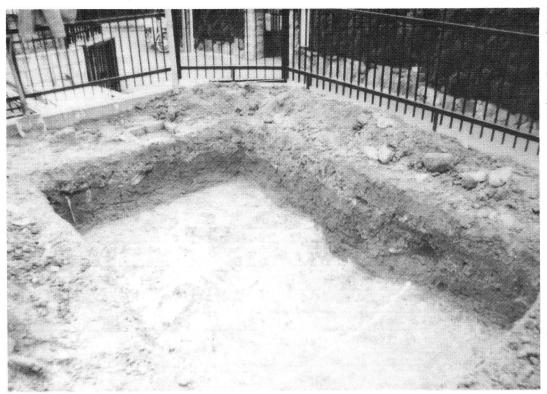


図-7 軒丸瓦





トレンチ全景



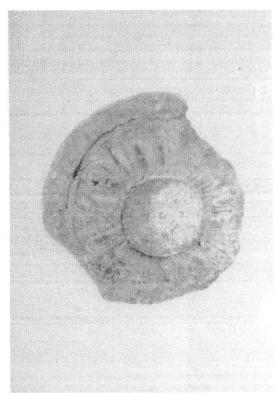
トレンチ全景



トレンチ全景

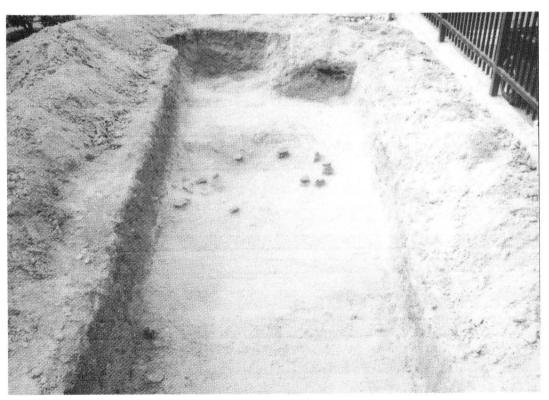


遺物出土状況





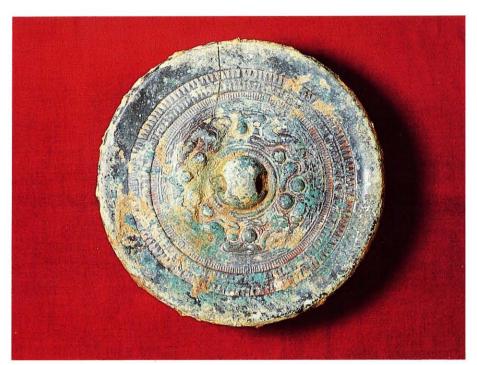
出土遺物



トレンチ全景



茶臼塚古墳外壁



石室内出土 四獣鏡

# 松岳山古墳群

#### 茶臼塚古墳(85-1次調査)

·調查地区所在地 柏原市大字国分1655番地

•調查担当者

竹下 賢

・調査期間

1985年7月17日~8月25日

・調査面積

28 m²

#### 1. 調査に至る経過

奈良盆地の水を集めた大和川が、蛇行しながら大阪平野に流れ出る出口の左岸丘陵上に松岳 山古墳群は位置する。茶臼塚古墳は松岳山古墳の西方、つまり前方部に殆んど接して位置する、 一辺約20mの長方形墳である。1984年12月、裏山弥太郎氏所有の果樹園において、所有者らが 貯水槽設置工事中に主体部を発見し、三角縁神獣鏡、多量の碧玉製腕飾類の出土をみた。その 際実施した緊急調査では、工事により開口した石室南半部の記録に主眼をおき、石室の規模、 構造を明らかにした。また地形測量も行なった<sup>1)</sup>。今回の調査は、裏山氏と協議を重ね、氏の協 力を得た上で、墳形、規模、石室北半部の状況を確認するために実施したものである。

#### 註 1. 安村俊史「松岳山古墳群」『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1984年度』

1985

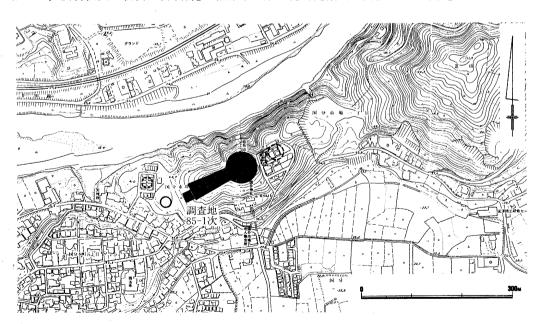


図-9 調查地位置図

- 2. 調查日誌抄
- 区の埋土除去。今回調査区(以下Cトレ) はGL下20cmまで掘削。
- 7月18日 (木) 晴 石室内に落ち込んだ石 正好氏) 材の除去。作業中、鍬形石の破片出土。石 室東壁は内側へ倒れ込み、遺存状況は不良。 西壁はほぼ完存。
- 7月19日(金) 晴 Cトレ、表土、耕土除 去面で写真撮影。Eトレ設定、掘削。

- 7月22日 (月)晴 Cトレ、GL下50cmまで掘 削。控え積みの最上面検出。写真撮影用の 清掃 (~25日)。
- 7月25日 (木) 晴 Cトレ、写真撮影。
- 7月26日(金)晴 Cトレ、割付と実測。 Eトレ、西端に板石の積み上げを検出。
- 7月27日(土)晴 Cトレ実測(~29日)。 Eトレ、板石小口積は茶臼塚古墳の東辺、 外壁であることを確認。

- 7月17日(水)晴 機材搬入。84年度調査 | は松岳山古墳の前方部であることを確認。 写真撮影用の清掃(~8月1日)。
  - 7月30日 (火) 晴 (奈良大学教授 水野
  - 8月2日(金)晴 Eトレ、写真撮影。東 北方向にトレンチ設定(NEトレ)。
    - 8月3日(土)晴 Cトレ、落ち込んだ石 材を上から順に除去。(帝塚山大学教授 堅 田 直氏)
- 7月20日(土) 晴一時雨 Cトレ、GL下30 | 8月5日(月) 晴のち雨 Cトレ、石室全 cmまで掘削。Eトレ掘削 (~27日)。 容あらわす。奥壁ほぼ完存。Eトレ、実測 (大阪府教委 松岡良憲氏) (~13日)。NEトレ、掘削 (~10日)。
  - 8月6日(火)晴 Cトレ、棺床近くまで 下げる。石室北側小口部から鉄器類出土。 (京都大学名誉教授 小林行雄氏、奈良国立 文化財研究所所長 坪井清足氏)
  - 8月7日 (水) 晴のち雨 Cトレ、棺床精 査。腕飾類出土しはじめる(~14日)。
  - 8月8日(木)晴一時雨 NEトレ、拡張。
  - 8月9日(金)晴 (神戸商船大学教授 北 野耕平氏)
- 7月29日(月)晴 Eトレ、楕円形埴輪が │ 8月10日(土)晴 NEトレ、鰭付楕円形 原位置を保ったまま出土。テラス、傾斜面 | 埴輪が原位置を保って出土。(府教委 阪







調査風景(1)

- 田育功氏·松岡氏、羽曳野市教委 笠井敏 光氏)
- 8月11日(日)晴 NEトレ、写真撮影用 の清掃(~12日)。(大阪経済法科大学教授 村川行弘氏、藤井寺市教委 上田 睦氏)
- 8月12日(月) 雨 Cトレ、鏡出土。(大阪 府埋蔵文化財協会 井藤 徹氏)
- 8月13日(火)晴 E2トレ、設定、掘削 (~15日)。2段目の立ち上がりらしき石積 み (現存高約15mm)を検出。NEトレ、写 真撮影。(府立登美丘高校教諭 冨賀 肇 氏、飛鳥資料館 猪熊兼勝氏・小林健一氏)
- 8月14日(水) 晴 Cトレ、写真撮影。作業中、石室東壁の一部崩落。Eトレ、松岳山・茶臼塚間の溝を掘削、両者の前後関係確認。NEトレ割付、実測(~16日)。(文化庁 伊藤 稔氏、府理文協 井藤氏、府教委 堀江門也氏、堺市教委 白神典之氏)
- 8月15日(木)晴 Eトレ、写真撮影、埴 輪取り上げ(~17日)。(藤教委 天野末喜 氏、岡山大学助手 新納 泉氏、京都大学 大学院 森本 晋氏)
- 8月16日 (金) 晴 Cトレ、写真撮影。E 8月25日 (日) 2トレ 実測、写真。(藤教委 上田氏) 機材撤収。

- 8月17日(土)晴 Cトレ、遺物出土状況 実測取り上げ。NEトレ、西側の埴輪取り 上げ(~18日)。
  - 8月18日(日)晴 Cトレ、粘土棺床精査。 Eトレ、実測 (~19日)。
  - 8月19日(月)晴 Cトレ、石室実測(~20 日)。NEトレ、埴輪除去後の写真。
  - 8月20日(火)晴 E、E2トレ、埋戻し。 (大阪市文化財協会 永島暉臣愼氏)
- 8月21日(水) 晴 Cトレ、棺床たちわり。 NEトレ、埋戻し。(奈良県立橿原考古学研 究所 石野博信氏・泉森 皎氏・他)
- 8月22日(木)晴 Cトレ、棺床たちわり 時出土の腕飾類の実測・写真・取り上げ。 (橿考研 河上邦彦氏)
- 8月23日(金)晴 Cトレ、鉄器類の実測・ 写真・取り上げ。(大阪市文化財協会 数名、 橿考研 ト部行弘氏、広陵町教委 吉川勝 則氏)
- 8月24日(土) 晴 Cトレ、埋戻し。(~25 日)。(府埋文協 高島 徹氏・渡辺昌宏氏・ 田中一広氏・田中晋作氏)
  - 8月25日(日)晴 Cトレ、埋戻し完了後、 機材撤収。





調査風景(2)

#### 3 調查成果

前述したように、今回の調査の目的は、墳形、規模、石室北半部の状況の確認である。ただ し調査地は果樹園であり、調査期間中も栽培中であったため、トレンチの設定については所有 者の了解を得、樹木に影響が及ばない範囲内で必要最小限にとどめた。

まず主体部に「Cトレンチ」を設定。次いで、墳丘東辺確認の為に「Eトレンチ」「NEトレンチ」を設定。そして最後に、墳丘構造確認の為に「E2トレンチ」を設定した。以下、「Eトレンチ」、「NEトレンチ」、「E2トレンチ」、「Cトレンチ」の順に記述する。なお地形測量図に示した座標は、昨年度調査時に想定した石室中軸線を基準に設定したものである。

#### ・Eトレンチ

昨年度調査時に実施した地形測量の結果、茶臼塚古墳は直径約20mの円墳と推定された。E トレンチはその結果に基き、石室中軸線から10m東に設定したトレンチである。所有者らの談 によるところの「数年前、耕作中にGL下約40cmで板石が多量に出た」箇所でもある。

GL下40cmまでは耕土、床土であった。それ以下は安山岩の板石、径20cm前後の河原石のみの堆積であった。それらは茶臼塚古墳、松岳山古墳を覆っていた石材の滑落による堆積である。石材堆積除去後、トレンチ西方から順に、茶臼塚古墳の外壁の積み上げ、松岳山古墳前方部テラスの積み上げ、テラス、鰭付楕円形埴輪、1段目基底部の積み上げをそれぞれ検出した。

茶臼塚古墳の外壁の積み上げはGL下1mで検出した。石室の構造と同様、安山岩の板石(30×20×5 cm前後)を小口積みにしたもので、その壁面は地表面に対してほぼ垂直である。積み上げは松岳山古墳の前方部前面に堆積した褐色細砂質土上、標高48.5m附近から行なわれ、現状では基底部から約90cmの積み上げが遺存している。後述するE2トレンチの状況から、この積み上げは本来150cmの高さを持つものと考える。検出当初、この板石の積み上げは竪穴式石室の裏側であり、板石、河原石の堆積は土が殆んど混じらないことから控え積みであると考え、南北方向に長軸をとるもう1つの埋葬施設の存在を想定した。しかし、裏側にしては面が揃いすぎていること、あるいは石室内側と考えても壁面に朱の塗布がみられないこと、そして原位置を保つ埴輪の存在などから石室とは考えられず、基壇積石塚にみられるような、古墳の外部施設であるとし、この積み上げを茶臼塚古墳の東辺と確認した。

茶臼塚古墳外壁から30cm東にそれと平行する松岳山古墳前方部テラスの積み上げを検出した。 標高48.35m附近から垂直に積み上がり、高さは約40cmである。用材は安山岩の板石。茶臼塚古 墳の基底部とに15cmの高低差があり、茶臼塚のほうが高い。それは茶臼塚古墳と松岳山古墳の 築造の前後関係を示し、時間的な差違は殆んどないものの、松岳山古墳が先行すると考える。

テラスは東西幅約130cmを測る。その上面は安山岩割り石で覆われ、ほぼ水平をなす。そのテラスの東端、ほぼ1段目基底部に接する状態で原位置を保って鰭付楕円形埴輪が出土した。

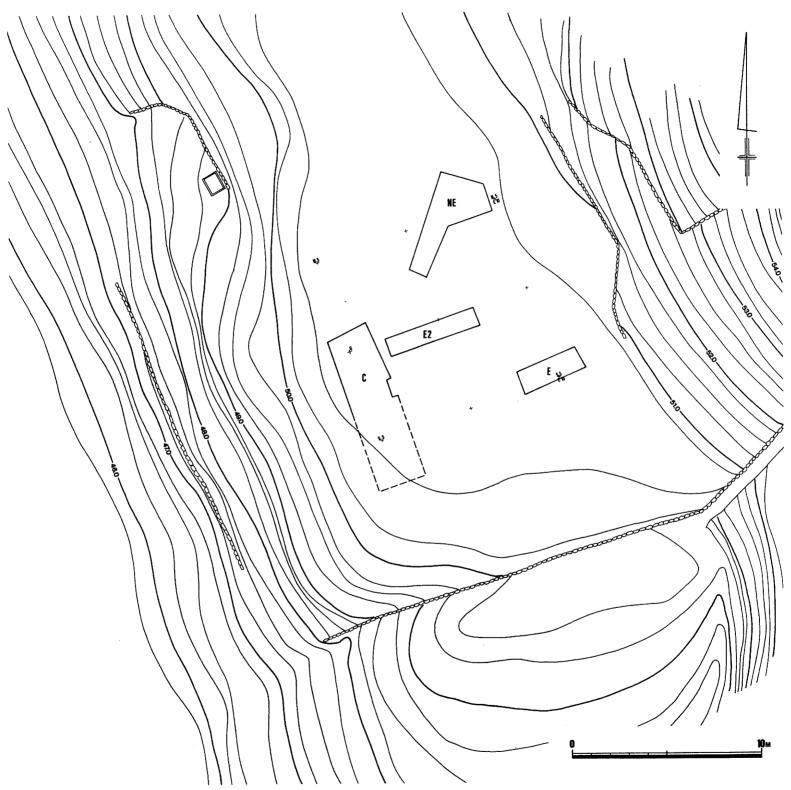


図-10 地形測量図 (1984年12月作成に加筆)

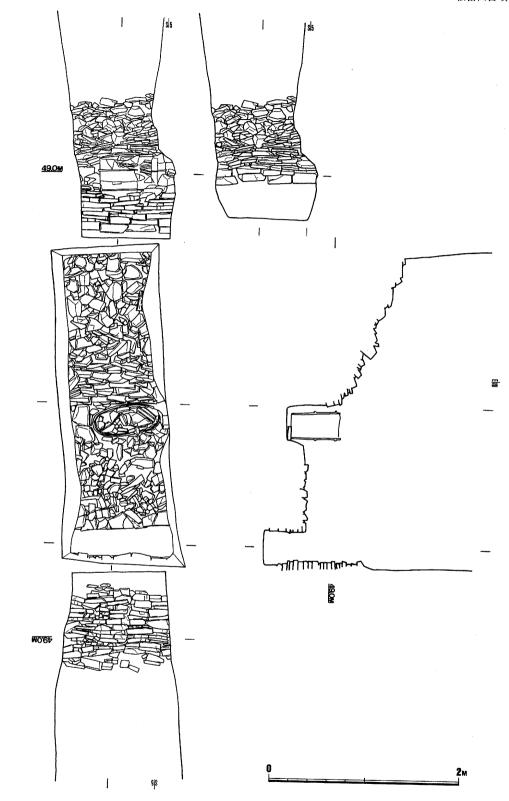


図-11 Eトレンチ実測図

設置はテラス形成後、長径90cm、短径45cm、深さ20cmの掘形を穿ち、南・西・北の三辺に安山岩割り石各1枚を置き、その上に埴輪を据えている。埴輪内には固定をはかる為に下から順に褐色砂質土、白礫混じりの砂礫土を充填している。厚さはいずれも15~20cmである。埴輪の上半分%は破壊をうけている。それが茶臼塚、松岳山から滑落した石によるものか、人為的なものかはわからない。トレンチ断面に現われた状況から、耕地面積を増やす為に茶臼塚と松岳山基底部との間に出来た「谷」をうめ、その際に埴輪を破壊したとの想定も可能である。

1段目基底部は安山岩の板石を、高さ約50cm、角度約40°で斜めに積み上げる。それ以上はや や角度が緩やかに整形した面を、径20cm前後の河原石で覆う。土圧による為か、板石の積み上 げ、河原石の並びは整っておらず、乱れが生じている。

#### ・NEトレンチ

墳形確認も含めた茶臼塚古墳の東北隅検出、Eトレンチで得た情報の確認の為、石室中軸線に対して45°東へ振った方向に設定したトレンチである。まず45°方向に設定し、掘削し、外壁基底石の確認後、松岳山古墳方向つまり東へ拡張した。

GL下約80cmまでは表土・耕土、開墾に伴う安山岩混じりの攪乱である。それ以下はEトレンチと同様、安山岩の板石、径20cm前後の河原石の堆積である。石材堆積除去後、西方から順に、茶臼塚古墳の外壁基底石、松岳山古墳前方部テラス積み上げ、テラス、鰭付楕円形埴輪、1段目基底部の積み上げをそれぞれ検出した。

茶臼塚古墳の外壁基底石はGL下150cmで検出した。安山岩板石の小口積みで、形成された面は垂直である。松岳山前方部テラス積み上げとの間隔が20cmと狭く、その間は掘削しなかった。その為、現存高、下位での積み上げの状況はわからない。この積み上げを検出するまで、石材の堆積を攪乱による堆積と解し掘削した。堆積中に埴輪片が混入していたからである。しかしこの堆積の上面が標高50cmで水平をなし、後述するE2トレンチでの1段目テラスの標高と一致することから、その水平面を1段目テラス、堆積を外壁の裏込めと想定することも可能であり、それを抜いてしまったという不安もぬぐいきれない。

松岳山テラス積み上げはGL下160cm、標高49.2mで検出した。垂直な安山岩板石の小口積みである。ここで茶臼塚、松岳山両者の積み上げを比較すると、茶臼塚では板石の短辺を壁面に出す縦方向の積みをし、松岳山では横方向に積むという差違が認められる。

テラスは東西幅約130cmである。その上面には安山岩割り石や石英等の白色礫が見られる。レベルはほぼ水平である。鰭付楕円形埴輪はテラス西端から90cm東で検出した。検出当初、東西に2列に並ぶものと見られたが、西側は東側の上部が松岳山古墳葺石の滑落により破壊され、折れ落ちたと考えた。しかし整理・復元作業により、西側埴輪は南北いずれかに立つ埴輪の上部と判明した。また正立の状態であったことも確認された。このことから、開墾時に耕地に突

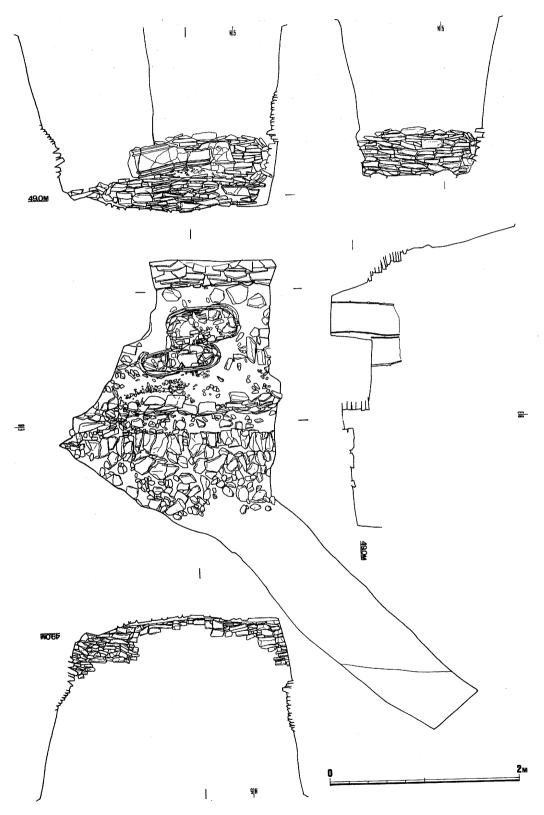


図-12 NEトレンチ実測図

出するであろう埴輪の上部を破壊して、隣接する埴輪に立てかけたとみられる。既存埴輪の設置はテラス形成後、長径90cm、短径60cm、深さ40cmの掘形を穿ち、据えている。固定をはかる為に厚さ約15cmずつで褐色砂質土、砂礫土を埴輪内に充填している。根石はない。

1段目基底部は安山岩の板石を高さ約50cm、角度約50°で斜めに積み上げる。それ以上は未確認の為、不明である。おそらくEトレンチで見られたように、径20cm前後の河原石で覆われた、やや角度の緩やかな傾斜が一段目テラスにむかって続くのであろう。

#### · E 2 トレンチ

墳丘構造、墓址確認の為に、石室中軸線に直交してCトレンチ東に設定したトレンチである。 トレンチ東端において、茶臼塚古墳1段目テラス、2段目テラスへの立ち上がり基底部を、 西端において、石室上面被覆粘土、石室控え積み、石室掘形をそれぞれ検出した。また、トレ ンチ中央を掘り下げたことで、墳丘構造、築造過程も判明した。

1段目テラスは攪乱土下に検出した。標高50.0mでフラットな面をなし、その表面には、安山岩割り石、自然石が葺かれている。E、E2トレンチで検出した積み上げがテラスを持たずにそのまま標高50.0mまで立ち上がるとすると、このテラスの東西幅は2mと想定できる。

2 段目の積み上げは石室中軸線から東 6 mに検出した。現存高は約15cm。安山岩板石の小口積みが 2 ~ 3 段遺存するのみである。上面は大きく削平されている為、本来の高さは不明。

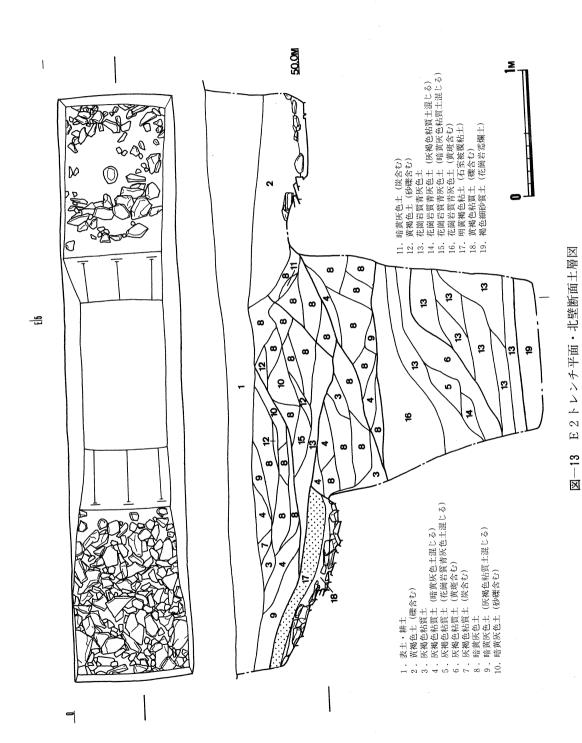
石室被覆粘土は明黄褐色を呈し、その厚さは10~15cm。良質の粘土を用材としている。

被覆粘土、第18層除去後、安山岩板石と自然石からなる控積みを検出した。18層直上から土師器の細片が出土し、粘土被覆前に何らかの儀式が行なわれたことが窺える。被覆粘土と控積みは東3.6mまで達し、これをもって墓址掘形の東端とすることができる。昨年度調査時には掘形の西端を確認しており、結果、墓址上面の東西幅は6.15mとなる。傾斜角は約55°である。

土層観察により墳丘すべてが盛土で築かれていることを確認した。盛土は標高49.5mを境に 二分でき、下半は花崗岩質青灰色土、上半は暗黄灰色土が主である。基本的には墳形を画する ように外周を堤状に盛り上げ、次いで内側を水平に盛るという手順を繰り返す。版築状に叩き 締めた形跡はみられない。レンズ状の層は畚などで運ぶ土量の1単位を示すのであろうか。

#### Cトレンチ

石室北半部の状況、石室規模の確認の為に、昨年度調査区の北側に設定したトレンチである。 GL下30cmで、安山岩割石、拳大の自然石の集積を検出した。調査区中央附近では、被覆粘 土とおぼしき良質の粘土が馬蹄形状に遺存して、集積の上面を覆っていた。厚さは約20cm。石 材集積は南側では石室東壁の崩れと共に生じた天井部の落下に伴い、約30cm落ち凹み、北側で は盗掘あるいは開墾による攪乱の為、被覆粘土の遺存もなく、集積上面の凹凸が著しい。E2



— 29 —

### 茶臼塚古墳

トレンチでの状況を勘案すると、この集積は控積みで、石室天井部までも覆っている。断面観察、控積み除去の結果、天井石と認められる巨大な石材はみられなかった。しかし、長辺40cm×短辺30cm前後を測る、石室構築材よりやや大きな石材が数点みられたことから、これらが組み合って天井石として機能していたと考える。

内部主体は安山岩板石を小口積みにした竪穴式石室である。規模は全長が620cm(昨年度調査分含む)、幅100cm、高さ170cmを測る。壁面の傾斜角は約85°である。現状では、東壁は上半が内側へ崩れ落ち、原況をとどめるのはわずかである。西壁は中央部で内側へせり出したり、北壁に近い箇所で一部崩落しているものの、遺存状況は良好である。北壁は完存に近い。北壁下部約30cmは内側へ10cm突出している。上面が粘土棺床テラスに近い高さをもつことから、石室構築時、壁体積み上げ前に、一旦基底石の高さを揃える為に設置されたものと解される。

粘土棺床は明黄褐色粘土で造られ、E、E2トレンチ最下部でも検出された褐色細砂質土層上、つまり墓址底に設置されている。全長は約600cm(昨年度調査分含む)、上面幅100cm以上、下面幅120cm以上、高さ40cmを測り、その断面は台形を呈する。円弧状のくぼみは深さ20cm。全体の形状は盗掘、壁体の崩落によるものか幾分損われており、特に上面左右の平担面で著しい。石室南端でも認められたように北端においても壁体との間に10cmの隔たりがあった。そこには5cm前後の小礫が充填されている。小口板の痕跡は認められない。棺床への朱の塗布は北側約1mでは希薄であり、それ以南、石室中央部では濃厚である。棺床上には白礫の散布がみられる。松岳山古墳項部、NEトレンチと同質のものである。棺床凹面に朱が塗布された後、テラス面、凹面に白礫が敷かれ、次いで割竹形木棺が安置されたようである。木棺の直径は60cm弱。木棺材の遺存は認められない。また木棺上部を覆う粘土の存否は不明である。

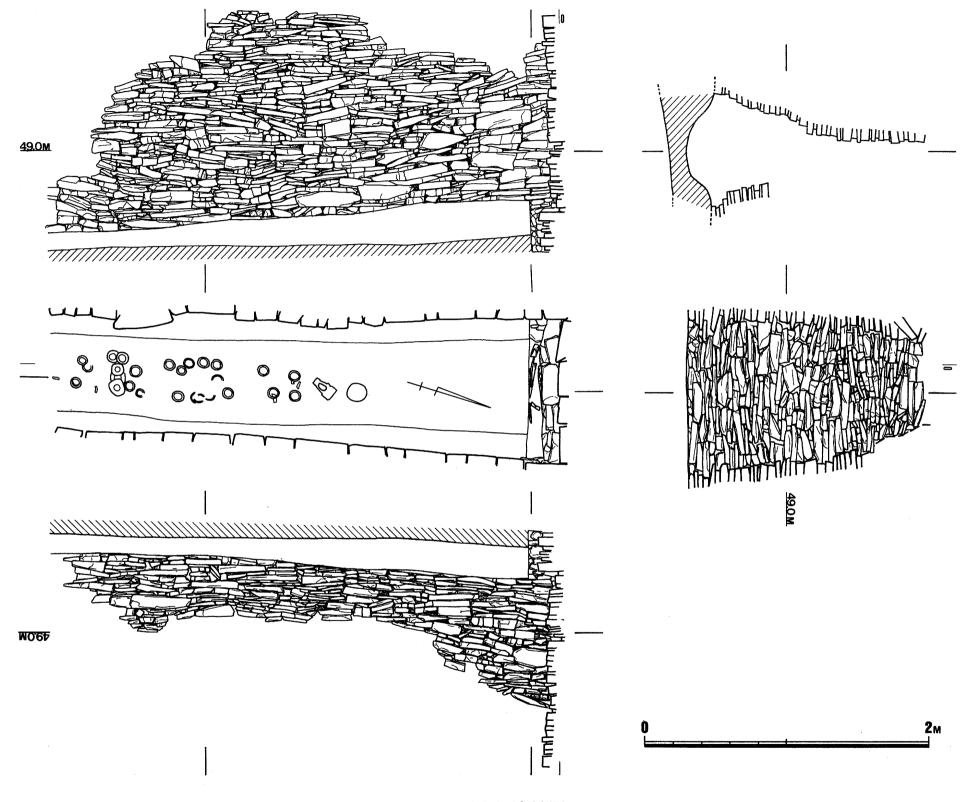
遺物は人為的な動きをうけない状態で、北から四獣鏡、鍬形石、2列に並ぶ石釧、集積する 車輪石、石釧がそれぞれ遺存していた。いずれも棺内副葬である。

鏡は鏡背を上にして棺床北端から120cm南で出土した。鍬形石は鏡から20cm南で、表面を上に し笠状部を南に向けて出土した。両者共、頭部附近の安置と解される。

石釧は棺床凹面の東西両側に約1mの範囲にわたって並列する。傾向として、東側は破壊、 倒立しているものが多く、西側はほとんどが完形で正立している。体側に安置したのであろう。

車輪石の集積箇所は石室のほぼ中心にあたる。車輪石4点が倒立し重なり合って東西方向に並ぶ、北側に接する石釧群も倒立する。また南側の石釧群もほぼ同様に東西方向に並ぶ。しかしすべて正立の状態にある。この集積は前述の鏡、石釧の位置からみて、足元あたりと考える。

石室南半での配置は発見者からの談によると棺床南端から約1mに鏡が、続いて約50cm北に 鍬形石、車輪石の集積が、そして中央部に向かって東西両側に並列して石釧があったらしい。



図一14 竪穴式石室実測図

# 4. 出土遺物

今回の発掘調査により出土した遺物は、四獣鏡、碧玉製鍬形石、碧玉製車輪石、碧玉製石釧、 鉄器類、円筒埴輪、鰭付楕円形埴輪、朝顔形埴輪、土師器丸底壺である。それらの中でも多量 の碧玉製腕飾類、特異な形態の鰭付楕円形埴輪がより特徴的である。なお玉類の出土はない。

### • 鏡

直径13.2cmをはかる仿製の四獣鏡である。鏡縁は厚さ0.5cmの斜縁。鈕座は有節重弧文圏座で、中央には直径2.5cm、高さ0.9cmの鈕を有する。獣形は4つの圏乳により等分された各区にそれぞれ配される。鈕座を中心にして対する獣形とは点対称である。胴部の向きは左向き2個、右向き2個で1対ずつ乳をはさんで向かい合う。頭部は縦位で正面を向く。内区外周には複線波文帯、櫛歯文帯がぬぐる。そして1段高くなり、外区には鋸歯文帯が2重にめぐる。

# • 碧玉製腕飾類

鍬形石は2個体出土した。1は全長15.5cmを測る。笠状部には1mmの沈線がめぐり、裏面には上端から円孔にかけて凹線が通る。笠状部と環体部は段でもって区画される。環体左側は直線的で右側は弯曲する。円孔は卵形を呈し、周囲は面取りが施され平坦面がめぐる。突起部の上端と下端にそれぞれ1条ずつ、また裏面右側にも凹線を有する。突起部下端はほぼ円孔下端の接線上にある。板状部左辺は直線的であり、右辺は突起部下端で一旦くり込み、弧を描いて下端部に至る。板状部下端を水平に置いた場合、笠状部上端は右上りとなる。色調は緑白色でグリーンタフ製。2は板状部のみ。淡緑色を呈する。

車輪石は4個体出土。3・4は正円形を呈する。3は傾斜面に放射状の匙面取りを施した後、頂部と谷部に1条の刻線を施す。4は凹面の頂部にのみ刻線を有す。硬質の碧玉製。5・6は下ぶくれの不整円形を呈する。5は傾斜面に匙面取りにより凹面を放射状に施すのみで、6は頂部と谷部に刻線を有す。以上4個体とも裏面は平滑である。

石釧は26個体出土。最大外径は30の9.2cm、最小外径は7の6.6cmである。数量の多さからその形状も多種多様である。7~9は傾斜面だけでなく側面にも文様を施す。8は傾斜面を4等分する位置に匙面取りを施し、各谷部に刻線を有す。また側面にも同様の文様を傾斜面に対して45°回した位置に施す。9は傾斜面の山形面取りの谷部に2条、頂部に1条の刻線を有し、側面には深い刻線を入れて半円状に突起させる。10~27は傾斜面に密な放射状櫛歯状刻線を施すものである。24のように間隔が広く浅いもの、26・27のように間隔が広く深く刻むものもある。10~20は傾斜面と側面の間に1条の凹線がめぐり、匙面取りも1度だけである。21~25は匙面取りが2度おこなわれ、25は下段谷部に1条の刻線がめぐる。26・27は匙面取りの上端と下端に1条ずつの刻線をめぐらす。28・29は傾斜面に放射状の匙面取りを施した後、頂部と谷部に

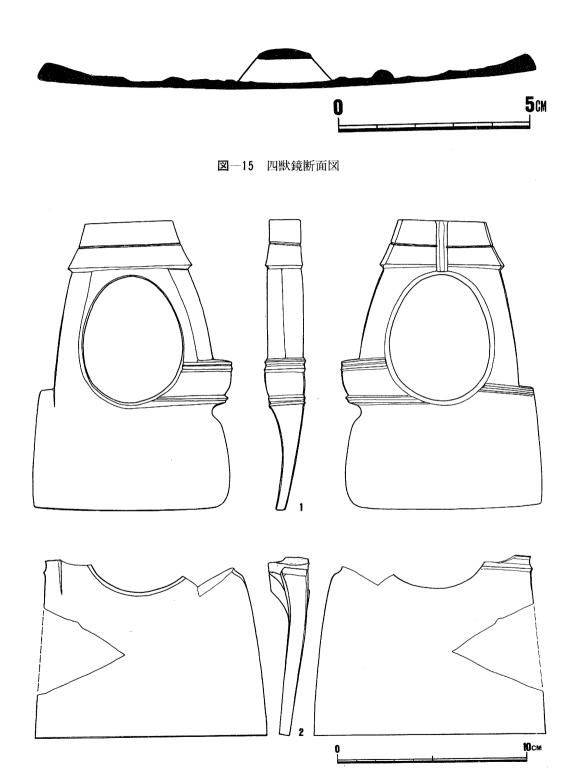


図-16 碧玉製腕飾類実測図(1)

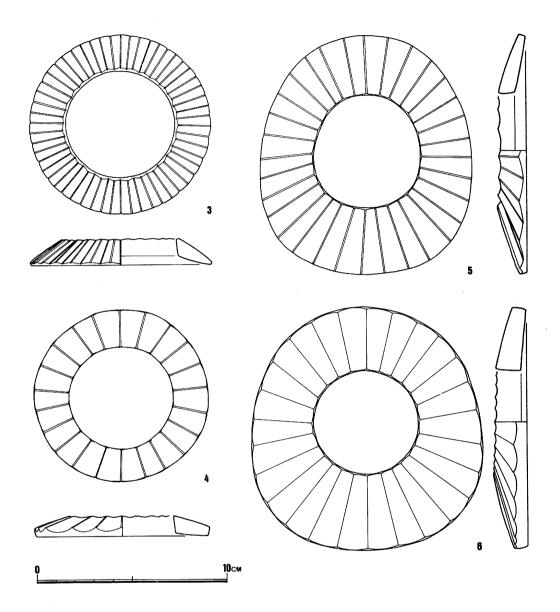


図-17 碧玉製腕飾類実測図(2)

各1条の刻線を施す。側面の匙面取りは28は1度、29は2度施す。30は傾斜面に放射状に匙面取りが施され、側面も1度の面取りによる。背が低いことから一見、車輪石のように見える。31・32は放射状櫛歯状刻線とそれを4等分する各2つの匙面取りが施される。31は各匙面取りの頂部に1条の、また32は頂部と谷部に各1条ずつの刻線を有する。

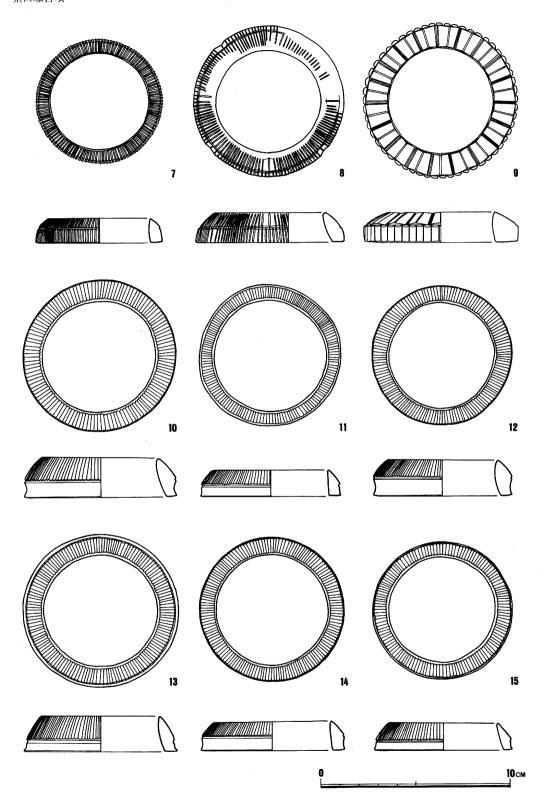


図-18 碧玉製腕飾類実測図(3)

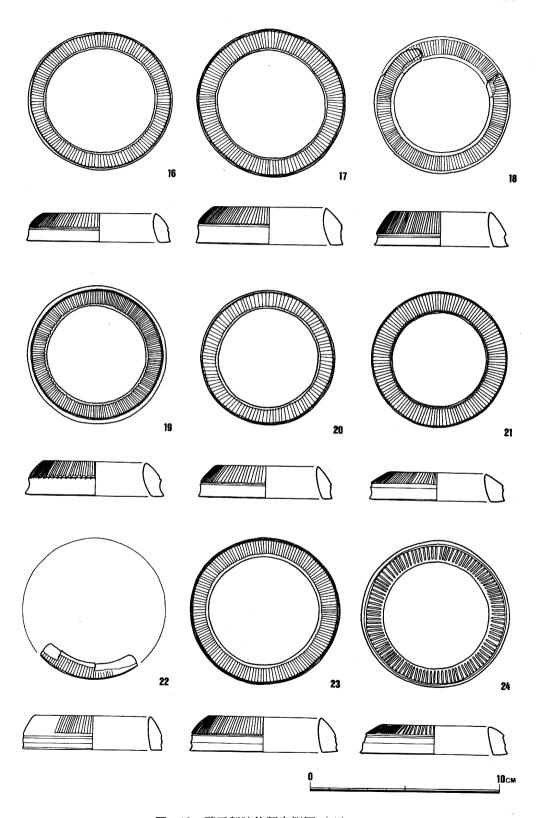


図-19 碧玉製腕飾類実測図(4)

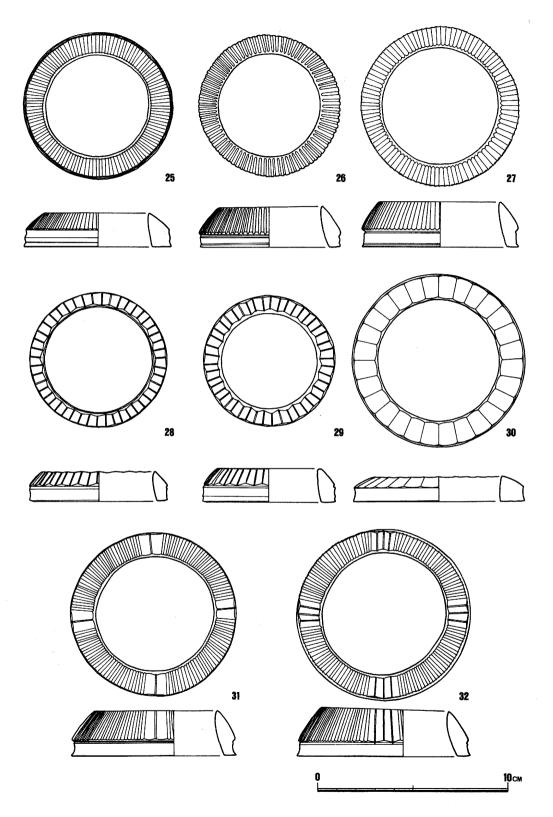
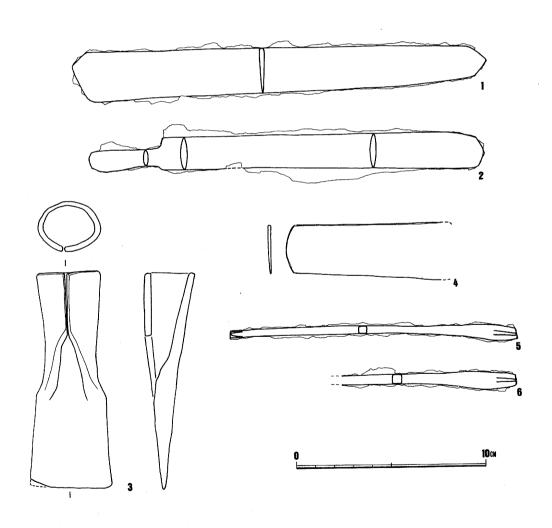


図-20 碧玉製腕飾類実測図(5)

## 鉄器

すべて石室北端、棺外から出土した。1・2は小刀状のものである。2は両刃になろうか。 先端は丸みを帯びる。1・2とも身部に木質が付着、遺存する。鞘におさまるのか。また銹化 が著しく、細かな形状については不明である。3は鉄斧。鉄板の上部両端を折り曲げ、袋状に する。刃部の幅は4.4cm。4は鎌。長方形鉄板の一端を、柄と身が直角になるように折り曲げた もの。先端は円弧状を呈する。木質の遺存はない。5・6は鏃になろうか。茎部は方形を呈する。 全体的に銹化が著しい。

1・2については帝塚山考古学研究所のお手をわずらわし、X線写真撮影を実施した。しかし文字資料は得られなかった。御高配を賜り、記して謝意を表します。



図一 21 鉄器実測図

#### 茶臼塚古墳

### 埴輪

復元しえたものは、円筒埴輪1個体、鰭付楕円形埴輪3個体である。

1はEトレンチ出土の円筒埴輪。現在高約60cm。体部直径は約30cm。口縁端部は外反し、シャープでやや肥厚し、端面と端部下面がやや凹む。凸帯はその端部を明瞭、シャープにし、端部と下面は凹む。調整は外面は8本/cmのタテハケ。内面はヨコハケからナデ。透し孔は3cm×9cmの長方形で、1段につき3ヵ所あく。穿孔は1段おきで、時計回りに30°ずつずれていく。朱が全面に塗布されている。この埴輪は茶臼塚古墳に樹立されていたと考える。

## 2~4は鰭付楕円形埴輪である。

2はEトレンチから出土した。器高158cm、長径64cm、短径42cmを測る。口縁端部は大きく外反し、端面は凹む。凸帯はすべてで8条めぐる。胴部第4段の上下には2条が接してめぐるこの形態は松岳山古墳独特のものである。凸帯断面は正方形に近く、上面、端面、下面は凹む。胴部第4段の左右側面には鰭が付く。全長35cm、幅11cm、厚さ1cmを測るものである。上端は

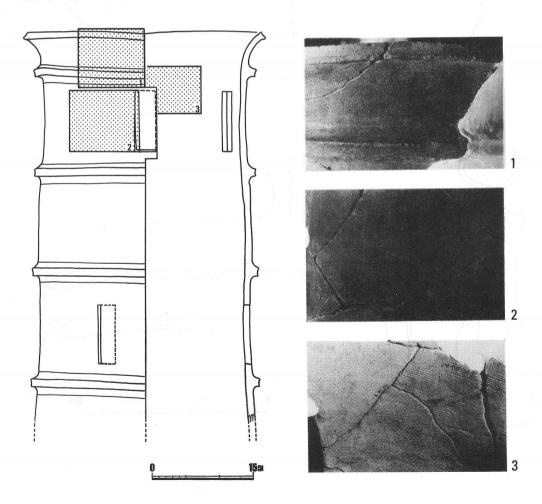


図-22 埴輪実測図(1)

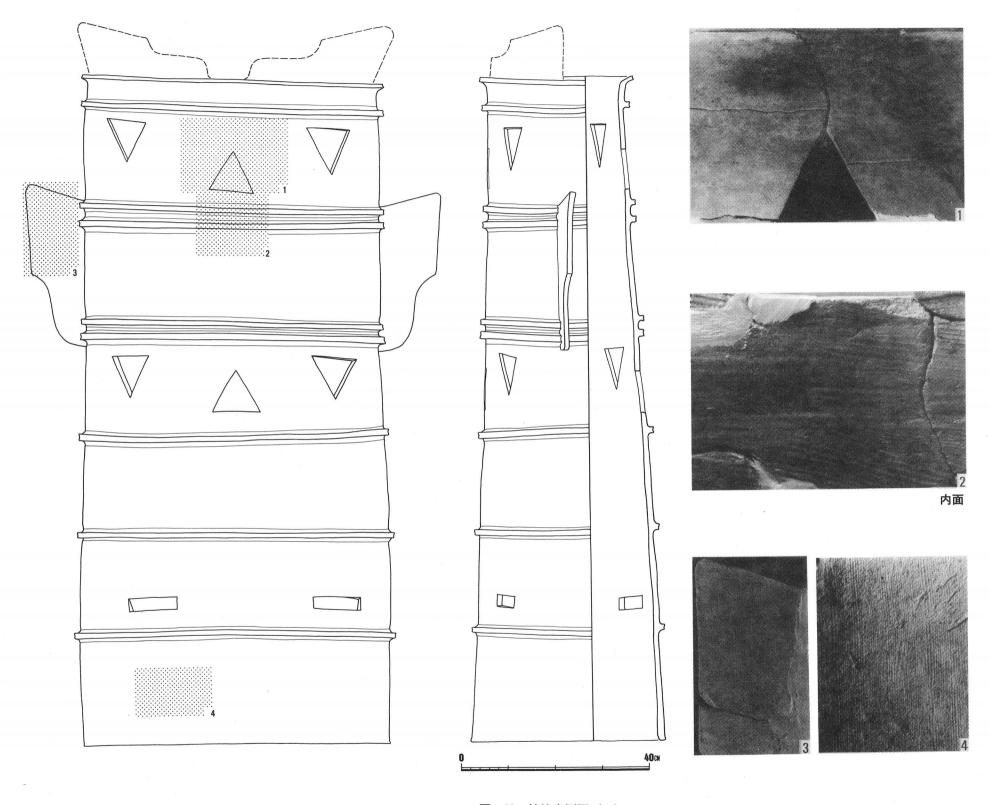


図-23 埴輪実測図(2)

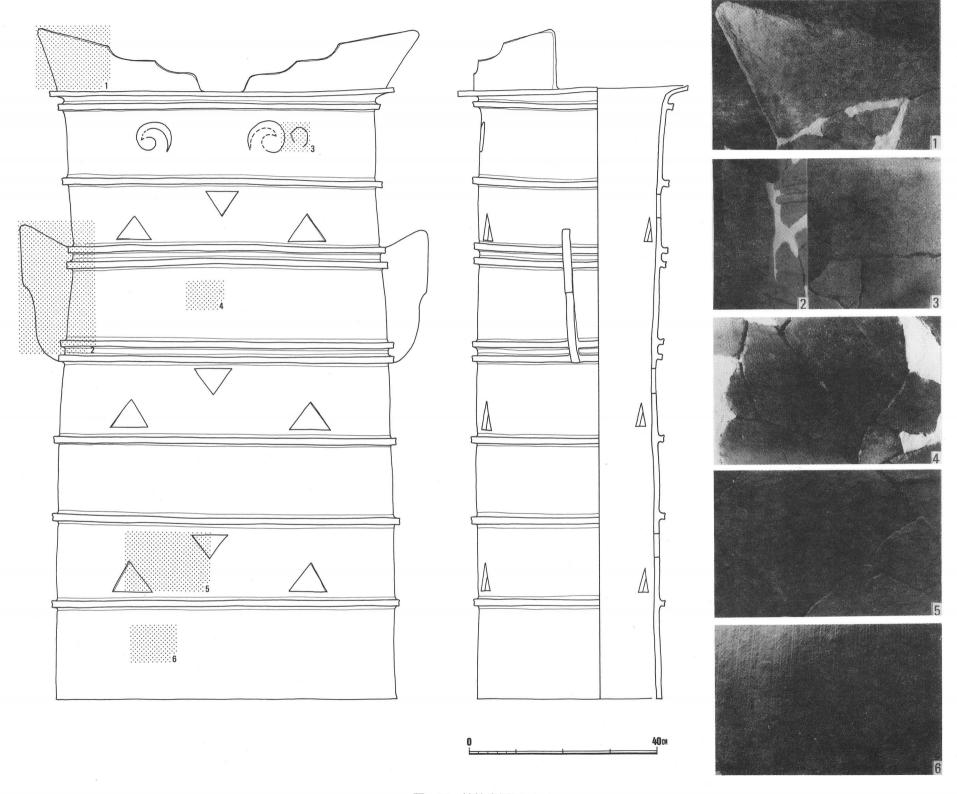


図-24 埴輪実測図 (3)

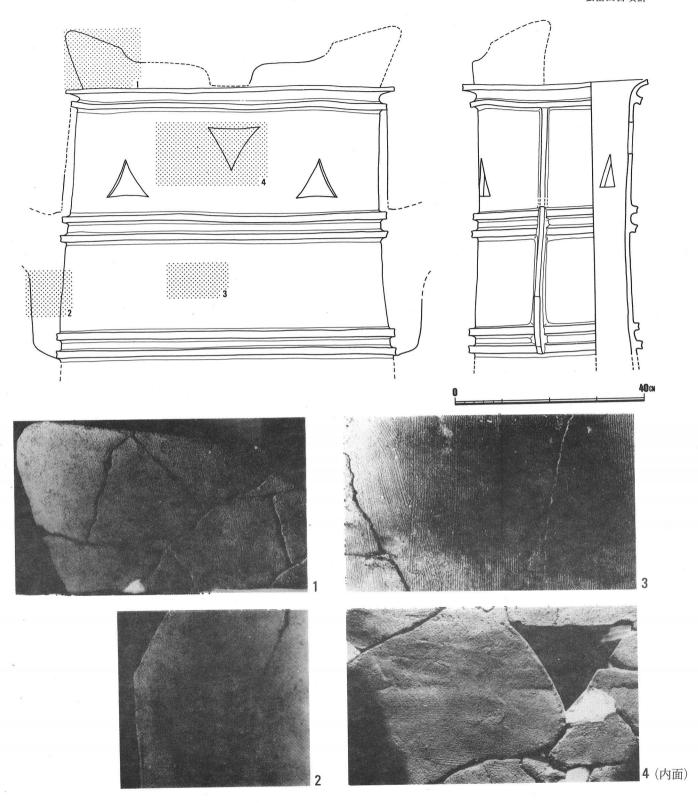


図-25 埴輪実測図(4)

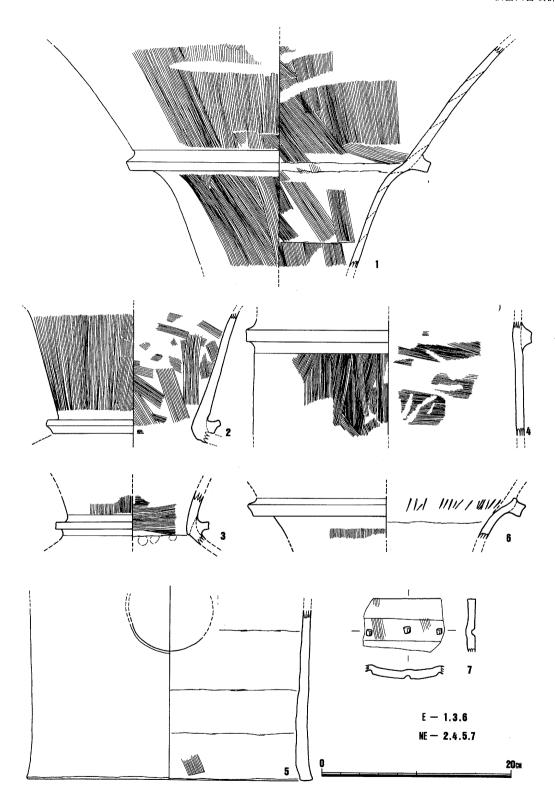


図-26 埴輪実測図 (5)

#### 茶臼塚古墳

斜め上方に伸びる。側面は直線的。下面はS字状を呈する。透し孔は胴部第1段、3段、5段に穿孔される。1段は10cm×3cmの長方形で横位置に配する。正面、背面に各2個ずつ。3段、5段には1辺10cmの三角形の透し孔が穿孔される。中央のものは正立し、左右のものは倒立する。正面、背面に各3個ずつ。調整は外面は基本的にはタテハケで一部不定方向のものもある。内面は板ナデとナデ。鰭はタテハケとナデである。赤色顔料の塗布は背面、つまり松岳山古墳を向く面の胴部第1段以上にみられる。鰭にはみられない。

3はNEトレンチ出土。原位置を保っていた方の埴輪である。器高(頭部装飾含む)143cm、長径70cm、短径40cmを測る。口縁端部は斜め上方に大きく外反する。凸帯は9条である。その上面、端面、下面は調整により顕著な凹みを呈する。胴部第4段の上下には2条が接してめぐる。その胴部の左右側面には、全長28cm、幅10cm、厚さ1.2cmの鰭が付く。上面は斜め上方に伸び、側面は直接的、下面はS字状を呈する。しかし埴輪2ほどのシャープさはない。透しは胴部第1段、3段、5段、口縁部にある。前者3者には1辺8cmの三角形の透し孔が穿たれる。中央が倒立し、左右が正立する。各段、正面、背面に各3個ずつ。口縁部には中・近世の瓦にある巴文のような透し孔があく。正面に2個あるのみで、背面にはない。直径は7cm。むかって右側の透し孔の右脇には穿孔する位置を示すのか、浅い円形の線刻がある。本来その位置に穿孔すべきものであったのか、右側の透し孔は左側に比してやや中心の方へずれている。特徴的なものは頭部につく装飾である。ほぼ左右対称で、斜め上方に鋭く張り上げる。円弧状のくり込みが2段あり、口縁端部へと続く。調整は外面は基本的にはタテハケ、内面は不整方向ハケ。鰭はわずかなハケとナデ。頭部装飾は不整方向ナデである。赤色顔料の塗布は胴部第2段以上で、背面のみ。鰭、頭部装飾への塗布はない。

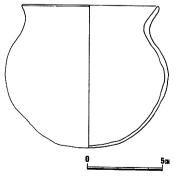
4は3の西方に崩落したものである。上部2段のみ。また鰭上部も欠き形状はわからない。 特筆すべきは口縁部側面につく凸帯である。胴部をめぐる凸帯と同じく、断面正方形を呈し、 鰭接合部上端から口縁部上部凸帯まで達する。背面に赤色顔料塗布。

5 は朝顔形埴輪、円筒埴輪片。朝顔形埴輪は1984年秋に実施した松岳山古墳墳丘測量調査中<sup>1)</sup>に表採したものと大差ない。凸帯接合部に方形の刺突痕をもつものがある。

註1. 安村俊史『明神山系遺跡分布調査概報 I 』1985

### ・丸底壺

NEトレンチで埴輪の周辺で散乱していた土師質の壺である。器高9.5cm、口径9.0cm、最大幅10.8cmを測る。内外面とも不定方向のナデ調整で、表面の凹凸は著しい。明茶橙色を呈し、1mm程度の砂粒を含む。



図一27 丸底壺

### 5. まとめ

全面発掘調査でない為、制約はあるが以下の成果を得た。

E・NEトレンチで茶臼塚古墳の東外壁を検出した。その結果、地形測量との結果もあわせて、墳形は東西16m、南北22m、高さ3mを測る2段築成の長方形墳と推察する。また調査地の南北両側も同様な地形を呈し、安山岩が多量に散布することから、松岳山古墳前方部西方には数基の同様の古墳が存在すると想定できる。

副葬品の特徴として多量の腕飾類の出土があげられる。前回調査分と合わせると石釧41個体、車輪石8個体、鍬形石6個体、総数55個体にものぼる。量的にみると、奈良・櫛山古墳、岐阜・長塚古墳、三重・石山古墳に次ぐものである<sup>1)</sup>。過去に多量の腕飾類を出している古墳のほとんどが100mを超える大型の古墳であり、今回のように比較的規模の小さな古墳からこれほど多くの腕飾類を出したことは稀である。このことは茶臼塚古墳だけにとどまらず、同様に腕飾類の出土をみた松岳山・ヌク谷北・東の大塚・向井茶臼山なども含めた「松岳山古墳群」が持つ特異性として扱われるべき事象であろう。また同じ前期古墳として松岳山丘陵の西1.2kmに位置する玉手山古墳群とは墓域、副葬品について対照的な傾向を持っている。これは今後、両古墳群の被葬者集団の性格、関係を捉えていく上で見落すことのできない事実である。

現在まで松岳山古墳の全長は墳丘測量調査により120~110mと考えられていた。しかし今回の調査で前方部を確認でき、全長を135m前後と考えた。前方部全体の形態が柄鏡状になるのか、 授状に開くのかは不明ではあるが、墳丘の実態にわずかでも近づいたと考える。

# 〔補記〕

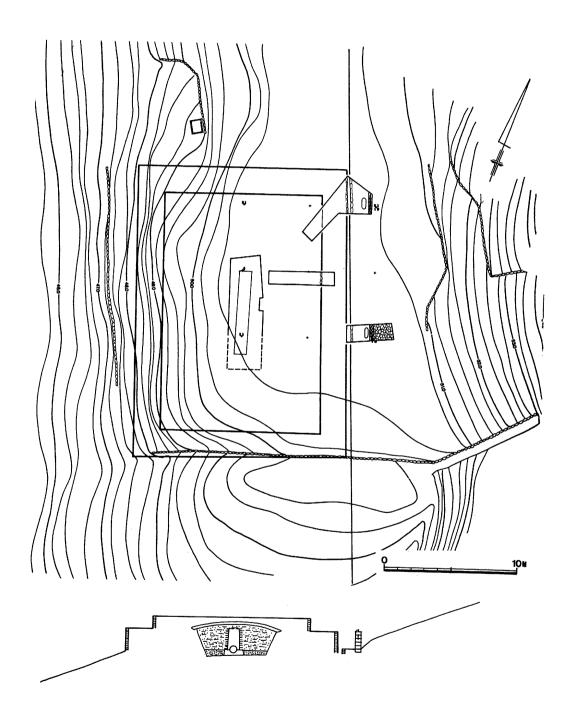
9月中旬、新聞紙上において「茶臼塚古墳の形態は高句麗式である」旨の発表を行なった。 その後、大阪市文化財協会 永島暉臣慎氏、慶応義塾大学教授 江坂輝弥氏をはじめ多数の方 から御教示を賜った。この問題については今後の課題とし、検討を重ねていきたい。

また現地説明会を実施しなかったことについても批判の声があった。前回調査後、新聞発表をした後、多くの見学者が訪れ、所有者の許可なく畑に立ち入り、作物を踏み荒らすなどの行為があった為、今回は所有者の切なる要望で実施しなかった。

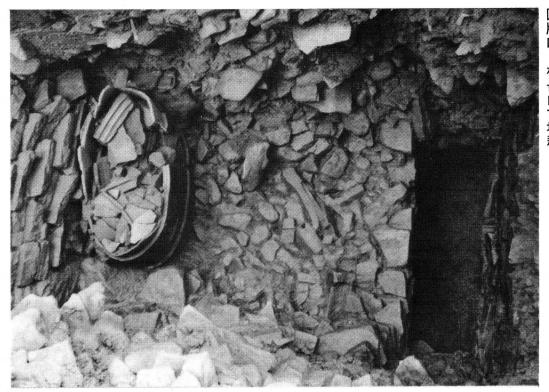
今回の調査では裏山氏をはじめ地元住民の方々、研究諸機関に多大なる御協力をいただき、 そのおかげをもって調査も無事終了した。末筆ではありますが、深く感謝致します。

註1. 中上京子 「石製腕飾類出土地とその集成」『大師山』 1977 今尾文昭 「大和出土の石釧・車輪石の類型と傾向」『考古学と移住・移動』 1985

(石田)



図一28 墳丘想定復元図



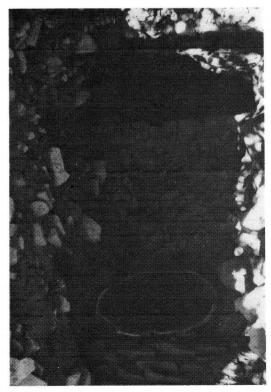
E トレンチ (北から)



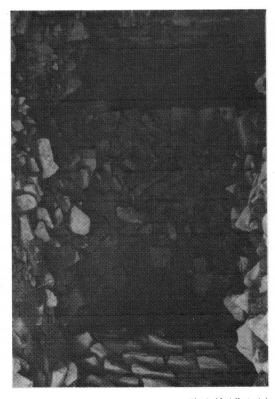
茶臼塚古墳外壁(東から)



Eトレンチ(西から)



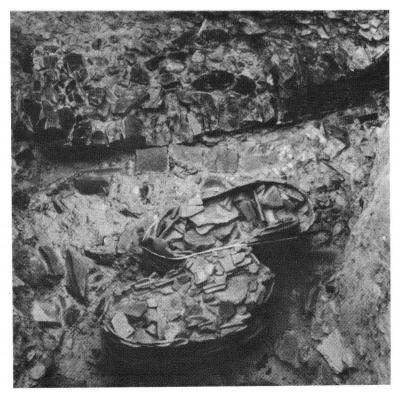
埴輪除去前(北から)



除去後(北から)



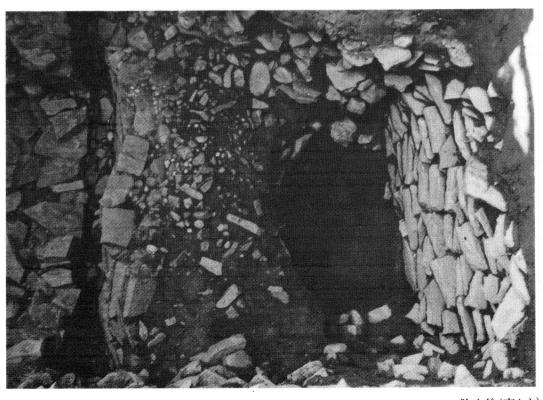
NEトレンチ(西から)



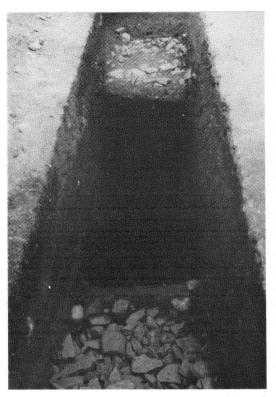
(東から)



埴輪除去前(南から)



除去後(南から)





. E2トレンチ(西から)

(東から)



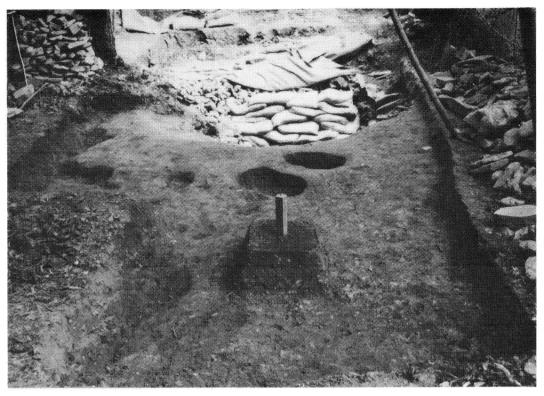
北壁土層断面(南から)



E2トレンチ西(南から)



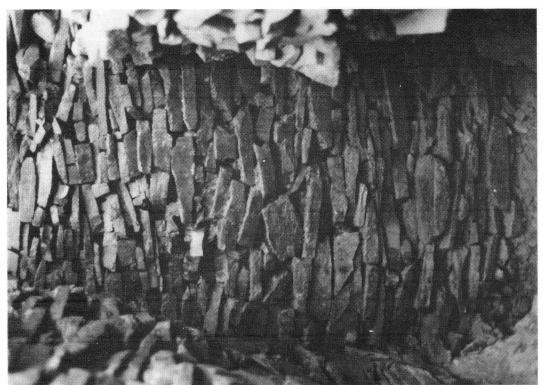
同 東(南から)



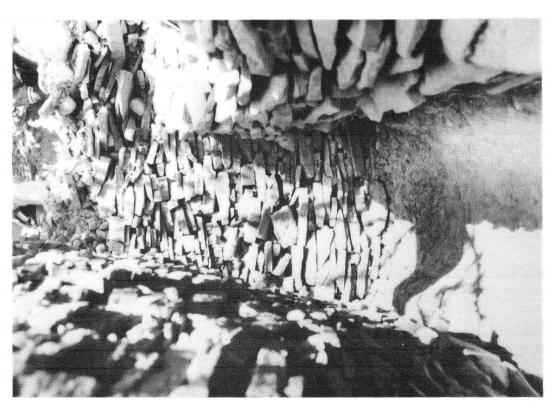
Cトレンチ表土除去後(北から)

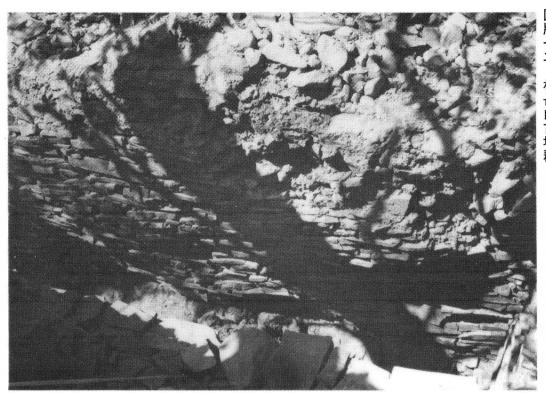


同 粘土層除去後(南から)

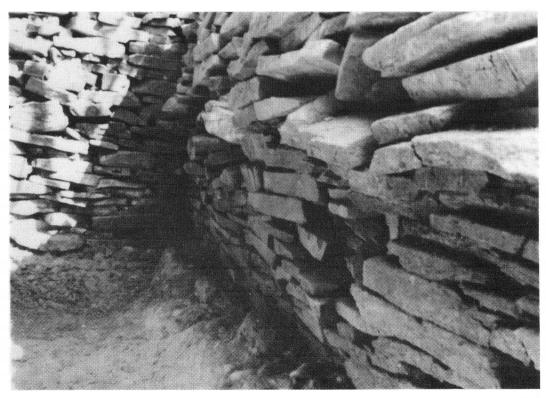


石室北壁





石室西壁



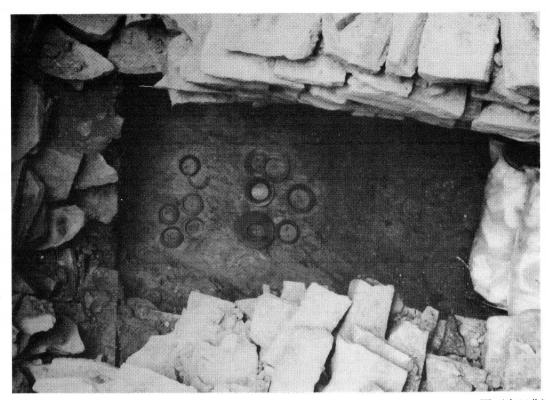
同 東壁



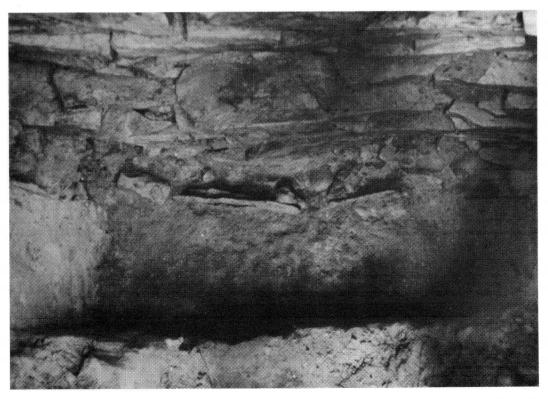
石室内遺物出土状況(右が北)



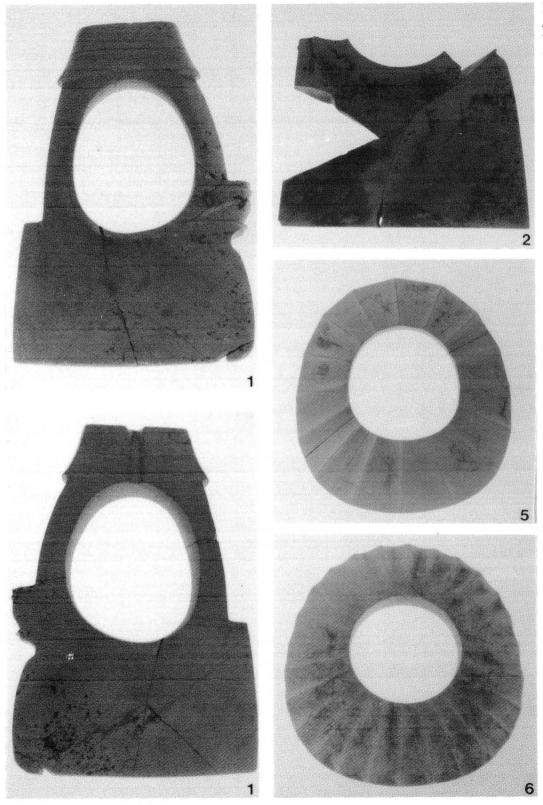
同 (南から)



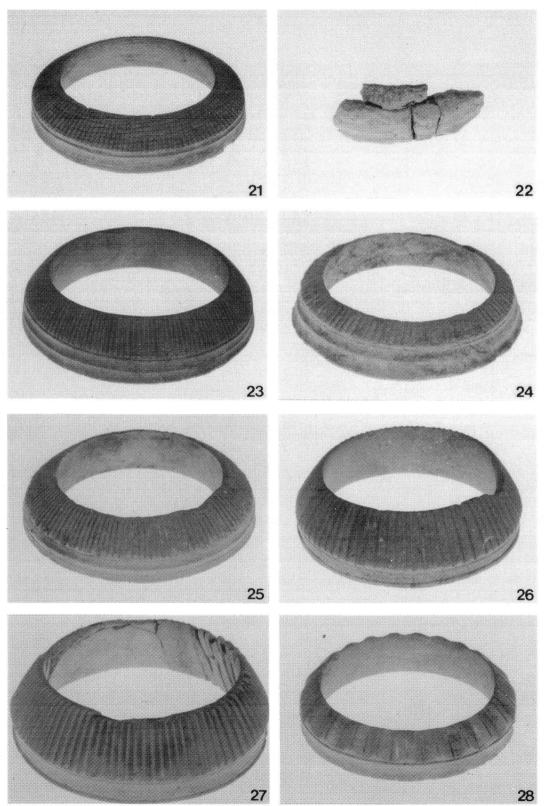
同 (右が北)



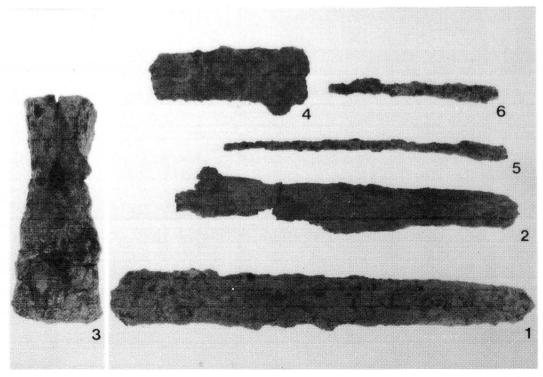
同 (上が北)



碧玉製腕飾類(番号は実測図と一致)



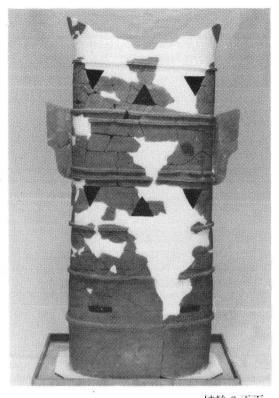
29 30 30 31



鉄器

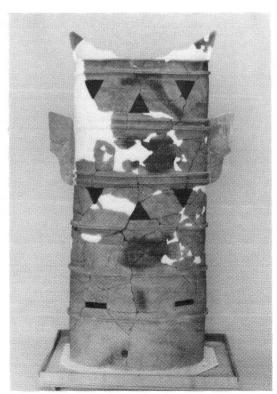
図版一九

松岳山古墳群

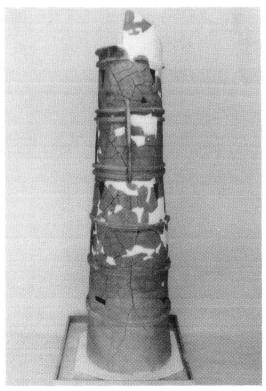


埴輪2正面

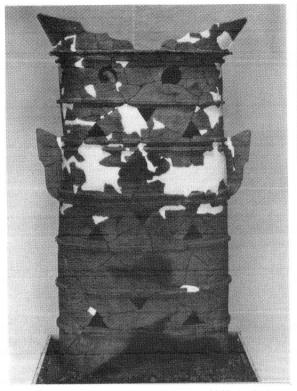
左側面





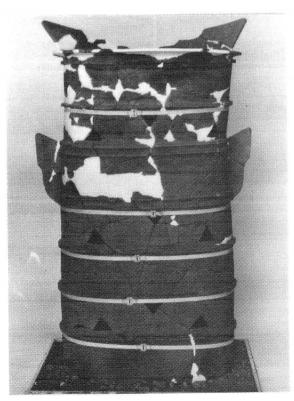


右側面



左側面

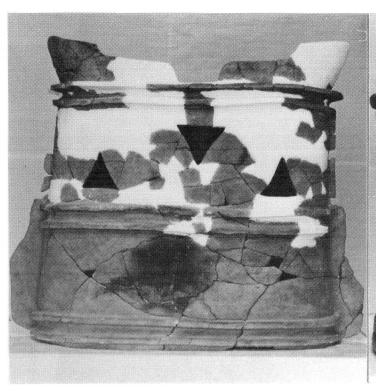
埴輪3正面





背面

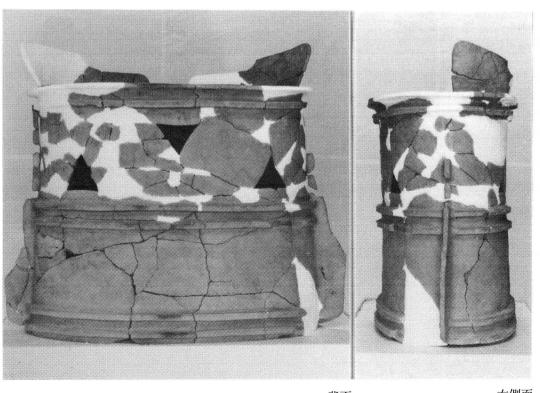
右側面





埴輪4正面

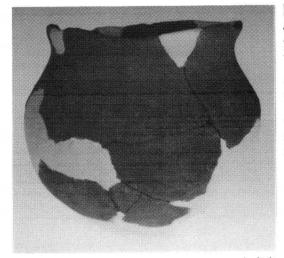
左側面



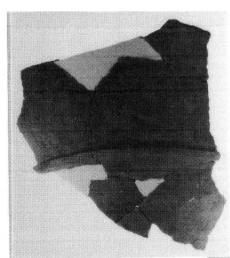
背面

右側面

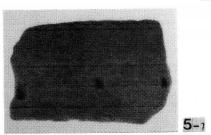


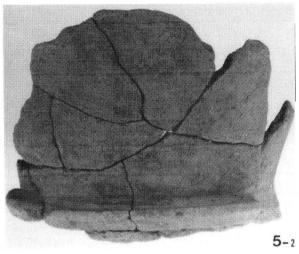


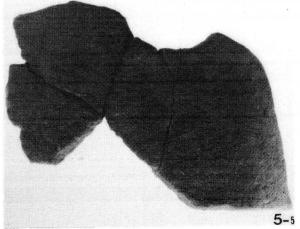
丸底壺











埴輪1,5

# 船橋遺跡

本遺跡は、河川敷の中にあり、現在も途切れる事なく水が流れている。この水流によって遺物包含層が上面からあるいは側面から自然崩壊している。特に大雨の降った後には激しい。また、古くから人為的な盗掘も多い地域である。

本年度も遺跡パトロールを適時実施した。盗掘も顕著にみられ、細い棒を突込んだ跡や地表からの割れた土層を壊した跡、あるいは小道具を利用して遺物包含層や遺構内の遺物を取り出した痕跡等である。大雨後の水流によって抉られた範囲もかなりの面積になったと考えられる。 抉られた土層の断面には溝、土抗、ピット、竪穴住居の落ち込み等の遺構も見られる。

今回表採した遺物は、これらの遺構から出土したと思われる遺物や時期を明確に出来る遺物 包含層から出土した遺物もあるが、大半は出土層位や出土地点が明確に出来ないものである。

遺物は、弥生時代から奈良時代に至る多くの時代の遺物である。大きく分類すれば、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期、奈良時代の四期にあたる。

弥生時代後期の遺物は、高杯、壺、甕等がある。全形を知り得るのは6の甕だけである。7 は、昭和57年度の採集遺物\*\*1と同類で、底部だけの破片であるが、体部から底部外面に籠目を押 圧した土器である。模様は、底部に近い荒い部分と上方の細い部分の2段に分かれる。内面は 密なヘラミガキを施こす。

古墳時代前期の遺物は、鉢、小型丸底壺、甕等がある。これらの遺物は、手法的には弥生時 代後期の遺物にみられるヘラミガキを持つものもあるが、胎土は精良なものが多く、器壁も薄 くつくられている。

古墳時代後期の遺物は、須恵器の杯、壺があり、土師器は、壺、かまど、羽釜、製塩土器等がある。須恵器は、6世紀前半代のものから奈良時代までのものがある。14は、かまどの眉庇部分で口縁端部外傾面に同心円紋叩き\*2を施している。17は、小型丸底の製塩土器で外面に平行叩きを施している。

奈良時代の遺物は、土師器の杯、高杯、瓦等がある。瓦は、平瓦と丸瓦だけであるが、拓影だけを掲載しておきたい。 (北野 重)

- 注 1 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度 船橋遺跡(安村俊一担当)図-60-7
- 注 2 柏原市所在遺跡発掘調査概報―大県遺跡、太平寺・安堂遺跡―1984年度で田中久雄が この種のかまどに注目している。

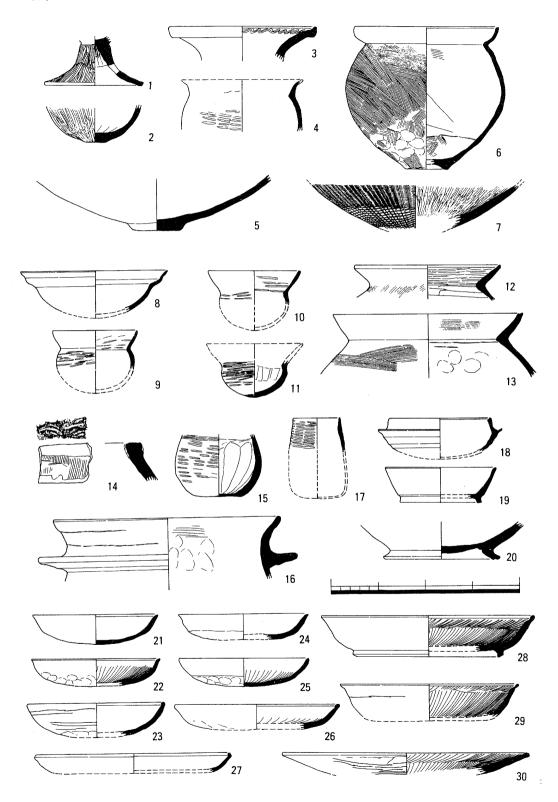


図-29 船橋遺跡採集の遺物(1)

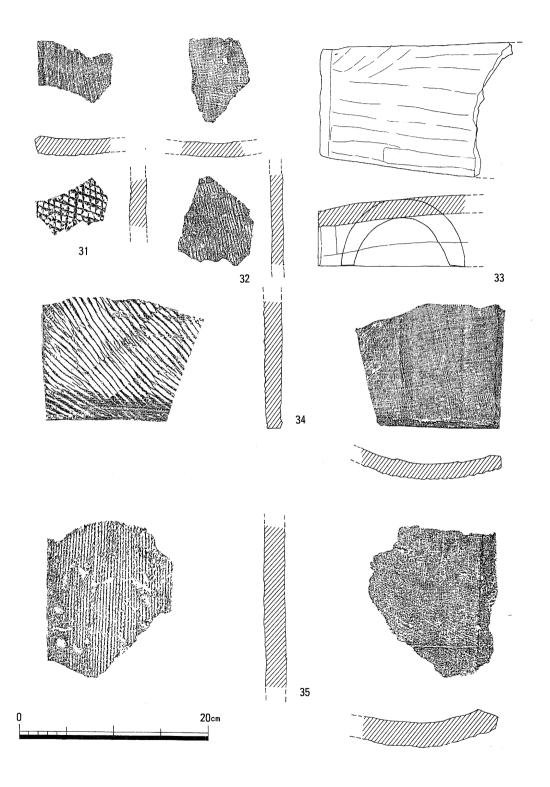


図-30 船橋遺跡採集の遺物(2)

# 本 郷 遺 跡

・調査地区所在地 柏原市本郷5丁目222-1他

·調査期日 1985年11月26日

·調査対象面積 2735.82 m²

• 立会担当者 桑野一幸

宅地造成工事の申請に基づき立会調査を実施し、地表下約1.5m以下で遺物が検出された。ここではその際得られた堆積状況と遺物の概要を紹介する。

本郷遺跡は現在の大和川北方に位置し、地表面はT.P.約13~15mにあって大和川の水面より低位にあたる。大和川付替え以前は大和川に望む低地帯にあって、しばしば河川の氾濫にみまわれたものと考えられている。これまで図-31の網点部分で発掘調査が行なわれている。①では地表下0.8~2.0mに江戸、鎌倉、平安、古墳、縄文各時代の遺構、遺物が検出されている。②ではT.P.12~14mで粘土層、シルト層があり、弥生、古墳時代の遺物が検出された。③の調査で

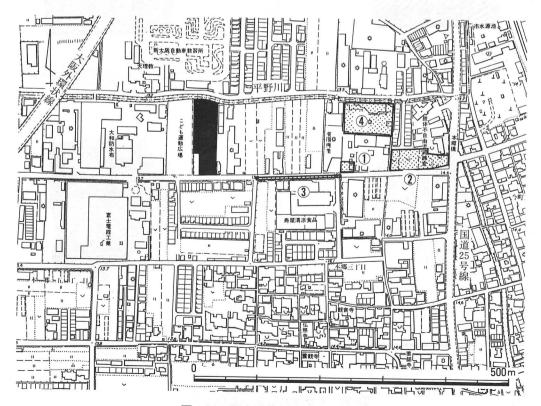
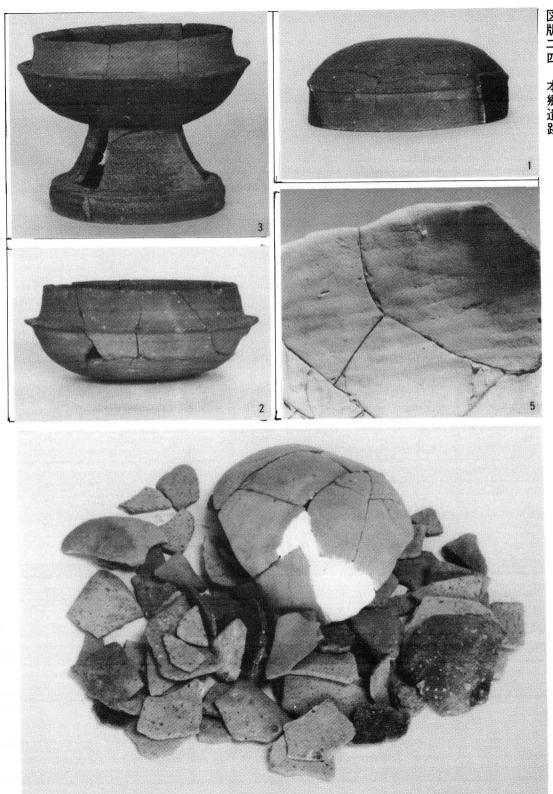


図-31 調査地位置図 (黒塗り)



製塩土器

GL \* \*

盛土

-1 m

★ はT.P.14m以下の粘土層から縄文、弥生、古墳時代の遺物が出土した。④ではT.P.12~15mの間に3回以上の厚い砂の堆積があり、粘土層から弥生、古墳時代の遺物が出土している。こうしてみると本郷遺跡ではT.P.約14m以下、地表から約1m以下(場所によって異なるが)で粘土層、シルト層、砂層が交互に堆積し、ここから縄文~中、近世の遺構、遺物が発見されるようである。

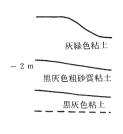


図-32 層位模

式図

今回の調査地は南北に長く、北側は平野川によって限られている。南から3ヵ所のトレンチを設定し堆積状況、遺物の有無を確認した。図-32は中央トレンチの層位模式図である。いずれのトレンチでも地表下約1.5mで灰緑色粘土層を確認した。その下部は砂層、シルト層、黒色の粘土層がみられ、約2.5m以下に厚い砂の堆積をみる。遺物は上部の灰緑色粘土層から出土した。南、中央のトレンチでは若干の土師器細片、木片等をみたにすぎないが、平野川に近い北トレンチでは須恵器の完形品を含み、土師器、製

塩土器等が検出された。これらは混在した状態で出土しているが、縄文、弥生土器等は見出されなかった。

1、2、3(図-33)の須恵器は完形で出土した。1の杯蓋は比較的平坦な天井部と口縁部との間に明瞭な段をもち、口縁端部は内傾し段をもつ。口径11.8cm。2の杯身は口縁部の立上りが長く端部は内傾し段をもつ。受部は水平方向に延び、回転へラ削り調整は深い。口径10.3cm。3は短脚高杯。口縁端部は内傾し段をもつ。一段透し孔は3方向にある。口径11.0cm、器高10.0cm。須恵器はいずれも青灰色を呈し、1~2mm大の石英粒が比較的多い。4の土師器杯は外面に手捏ね痕をとどめ、他は丁寧にナデ調整されている。口径14.8cm。胎土には砂粒が多い。5は製塩土器。器壁は極めて薄く1~2mm程度である。形状は方形に近い。外面は手捏ね痕を残すが、内面には叩き状の調整痕がみられる。復元できないが製塩土器の破片は多数あり、いずれも1~2mm程度と薄く、赤化し細片になっている。

前述したように本郷遺跡は大和川に沿った低地の自然堤防上に営まれており、こうした古墳 時代の遺物と遺構(集落、墓地)との関係を注意深く検討していきたい。

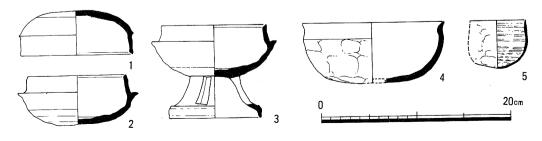


図-33 出土遺物

# 松岳山古墳群の被葬者集団

山 本 昭

- 1. 松岳山古墳群研究略史
- 2 松岳山古墳
- 3. 松岳山古墳と日葉酢媛陵
- 4. 武埴安彦の乱と河内青玉繋
- 5 豊城命と毛野国
- 6. 田辺史氏
- 7. あとがき

## 1. 松岳山古墳群研究略史

松岳山古墳と小古墳からなる群の研究は、著名な「船氏王後首」の墓誌出土地として江戸時代にはじまる(\*\*)。明治45年、喜田貞吉博士は「河内国分山船氏の墳墓一王辰爾墳墓一」(『歴史地理』19の6)において墓誌とこれを蔵した墳についての論を述べた。ついで梅原末治博士は大正5年『歴史地理』28の6、大正6年『歴史地理』29の4、で船氏墓誌出土墳の考察と群中からの出土遺物の研究をすすめた。このような研究経過のあと松岳山古墳(美山古墳)が大正11年史蹟として指定された。昭和に入って梅原博士は群の各墳から出土した遺物に検討を加えた(\*\*)。昭和29年大阪府教育委員会は史蹟指定の古墳の学術的解明を目的とした発掘調査を実施した。この調査成果は「河内松岳山古墳の調査」(『大阪府文化財報告第5輯』昭和32年)で報告された。昭和36年松岳山丘陵の一部で行われた宅地造成工事によって破壊中の二基の古墳(ヌク谷南塚・北塚)の緊急調査(\*\*)が北野耕平氏によって実施された。

こののちは松岳山古墳および群についての学術的調査と記録は見られない。昭和59年柏原市教育委員会による松岳山古墳の墳丘測量調査<sup>(4)</sup>が実施され、つづいて今回の調査対象となった茶臼塚古墳の第一次緊急調査があった。茶臼塚古墳の調査成果は柏原市教育委員会『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1984-1に報告された。そして翌昭和60年8月、同墳に対する未調査部の発掘調査が行われた。

以上のように松岳山古墳群は、江戸時代以来、多くの研究者によって直接、間接に研究の対象となった。この長年に亘る研究者の注目は、まず船氏の墓誌出土地として群中の古墳と墓誌銘中の人物との対比であった。次いで各古墳から出土した高級な遺物の研究が中心となった。これは松岳山古墳という群の主墳に示される類例の少ない埋葬施設とも深くかかわることを意識したものであり、同時にさきの船氏の墳墓を群中の古墳のいずれかに想定しようとする研究でもあった(6)。この松岳山古墳および群に対する被葬者ないしは集団を前提とした研究・考察を

強く意識づけたのは「河内松岳山古墳の調査」で小林行雄博士の遺体埋納施設たる石棺を中心 とした形式・編年についての論考である。この説は石棺編年にとどまらず、前期から中期古墳 研究の一指標として大きな刺激を与えるものとなった。

小林説による松岳山古墳の編年上の位置づけが、次の巨大古墳出現期と深くかかわるものであることに端を発して、松岳山古墳の立地と群を含めた高級副葬品の出土は、古市古墳群という天皇陵を含む巨大古墳群出現と何らかのかかわりを持つものであろうとする考察を促した感がある。それは西に隣接する前期を中心とした玉手山古墳群の示す各種の相違点に着目した考察である<sup>(6)</sup>。

本稿はこれらの研究成果の上に別の面から松岳山古墳と同群の被葬者および集団について考 察を試みようとするものである。それは松岳山古墳および同群が古市古墳群成立を考える場合、 玉手山古墳群と共に看過し得ない位置づけが固定しているように見受けられるからである。こ の試みは考古学的方法論からの問題はあろうが、古墳ないしは古墳群がその時代の歴史を伝え る考古学上の遺跡である以上は、これらに対する考古学からの考証は避けることのできな いものとなろう。 浜田耕作博士の「原史時代以後殊に歴史時代の考古学的研究に於ては、己 に前章述べたるが如く、絶対年代決定の場合の如きは、全く文献的資料との提携によりて之を 期待し得可きものなれば、考古学者は物質的資料の研究者たりと雖も、決して文献的資料を排 斥若しくは軽視し得可きに非ざるなり。否な此の両方面の研究は車の両輪の如く、相倚り相携 へて、文化科学の研究に副ふ可きものなり…。」(『通論考古学』大正11年)。「原史時代、歴史時 代の考古学に至っては、此の遺物の時代決定から進んで、更に大なる総合的研究を行ふ場合に 於いて、間断なく文献との交渉関係を生ずるのである。……ブーレ氏が文献的基礎無くしては、 考古学は殆ど一歩をも進むることを能わず、と云ったのは洵に以あることである。……考古学 者は其の研究の過程に於いて妄りに文献を顧慮して其れと妥協を試みるならば、其れは考古学 を以て文献学の奴隷注脚たらしめるのであって、真に考古学的研究の本領と価値とを発揮せし むる所以ではない。……」(『考古学研究法』「考古学とは何か」所収。昭和43年)は主として歴 史時代文献について述べられたものであろうが、博士の「総合的研究と間断なき文献との交渉 関係」の教えは古墳研究の一分野にとって再認識が必要となろう。

## 2. 松岳山古墳群

松岳山古墳が明治45年以来、古墳研究上興味あるものの一つとして意識されつづけてきたについては、松岳山古墳を除いて多彩な副葬品の出土した他の小古墳の実態が明らかでなかったことによるが、大きく3つに要約されるであろう。(1) は船氏王後首墓誌と古墳群との関係、(2) は墓誌研究を離れ古墳出土遺物の研究であり、(3) は松岳山古墳埋葬主体部の調査による小林博士の論説以来の古墳研究である。以上から松岳山古墳は一地方の古墳から、わが国に

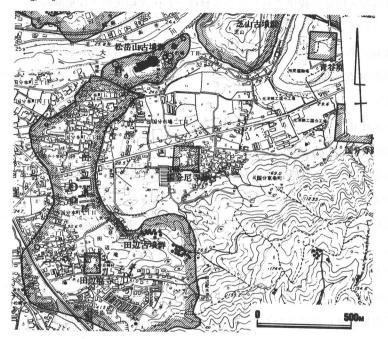
おける古代史研究を具体的に進展させる位置を占めることとなった。

松岳山古墳および同群は、その立地・埋葬施設・出土遺物から、いわゆる在地的・河内的前 期古墳のそれと内容において比較され、大和的色彩の濃い古墳群と認識されてきた感がある。 この感覚がさきの古市古墳群の出現、すなわち『記・紀』に伝える応神天皇にはじまる河内政 権の成立に直接・間接の影響を与えた古墳であろうとする考察を促しているようである。この 大和的色彩という概念を検討してみると、出土副葬品に限ってみれば、特に大和的を強く主張 し得るものでないことに気付く。すなわち向井茶臼山古墳出土と伝える3面の漢式鏡は極めて 鋳上りの優れたものではあるが、これだけで大和的とは言えないし、ヌク谷北塚出土の三角縁 神獣鏡を含む3面の同笵関係をもつ舶載鏡もまた同様で、各地の前期古墳出土鏡に徴すれば大 和的特異性を主張するものではない。さらに碧玉製腕飾類の一古墳または群全体からの出土数 の多さは特徴的ではあるが、これもまたいくつかの前期古墳に見られる数の範畴にある。これ ら副葬品の中で松岳山古墳に副葬されていた鉄製品の量は、盗掘後の残留量がなお24.6kgを測 るという多量さに注目されるが、一般に古墳盗掘者は銹化の著しい鉄製品を持去ることは少な いので、残存鉄製品の重量だけをもって大和的と断じえないのはいうまでもないところであろ う。ただここで松岳山古墳群の特徴を副葬品の上から挙げるとすれば、その内容が近接する玉 手山古墳群のそれに比べて品質・種・数量の上でかなりの差異の認められることであろう。但しこ のことは玉手山古墳群中の主要墳と目される1・2・3・7号墳などの副葬品の内容が未確認 であるので、この見解も保留される性格のものとなろう。

以上のように副葬品から古墳群の性格は窺えない。ここで先ず松岳山古墳群として注目されてよいのは群の立地である。東西約300mたらずの馬背状小丘陵に推定12基以上の古墳が密集して築かれていることである。この松岳山の丘陵は一見独立丘陵の如く見られるが、丘陵の西辺部は南へ弯曲して国分本町丘陵となり田辺丘陵へと連らなるものである。従って松岳山古墳群が他の古墳群の例の如く墓域を拡張する意志があれば、築造に最も適した丘陵が広がっているという地形が控えている。そこで松岳山丘陵西辺から南へ連らなる国分本町丘陵に松岳山古墳群が延長築造されている可能性が考えられるが、現在のところ同丘陵からかつて古墳の所在した痕跡・伝承は認められない。すなわち松岳山の小丘陵を限って十数基の前期古墳が築かれているわけである。これらの古墳は当然のことながら墳丘規模に厳しい制限が与えられている。120mを超える前方後円墳の松岳山古墳は別格規模として、今回の茶臼塚古墳も含めた十数基の古墳はことごとくが円墳・方墳と推定され径・辺いずれも30m前後の小墳である。ところがこのような小規模墳でありながら埋葬施設は既知の古墳に限ってみても、すべて長大な竪穴式石室に割竹形木棺を納め要所に多量の水銀朱を使用するという共通性を具えている。すなわち墳丘規模に不似合な埋葬施設と内容を群全体に認めることができる。

つぎは群の主墳たる松岳山古墳の特徴である。同墳の埋葬施設の特異性については、「河内松

岳山古墳の調査」で詳しく解説されている。これらの中でこの古墳を特徴づけるものの一つに石棺がある。5世紀代の大王ならびに強大な首長墓に共通して使用された長持形石棺に先行する形式として位置づけられた組合式石棺である。その二はこの石棺の前後に2.7mと2.0mを隔てて立てられている大形の有孔板石である。この有孔板石は松岳山古墳の名とともに早くから知られ、その用途・機能について多くの考察が加えられてきた(\*)が今日なお結論は見ていない。



第一図 松岳山·田辺古墳群分布図

国分中学校西古墳の埴輪

出土地名	所在	墳形	規模	主体部	石釧	車輪石	鍬形石	計
櫛山古墳	奈良県	双方中円墳	152 m	竪穴式石室	113	106	23	242
長塚古墳	岐阜県	前方後円墳	82 m	木棺	70	E.J. L. D. T		
		A CONTRACTOR	2 4 7 12 1 2 1	木棺			3	73
石山古墳	三重県	前方後円墳	120 m	粘土槨	13	44	10	67
東大寺山古墳	奈良県	前方後円墳	140 m	粘土槨	2	20+	23+	45+
大師山古墳	大阪府	前方後円墳	65 m	粘土槨	18	25	1	44
茶臼塚古墳	大阪府	長方墳	18 • 22 m	竪穴式石室	40	8	6	54
松岳山古墳	大阪府	前方後円墳	135 m	竪穴式石室	27+		1	28+
ヌク谷北塚古墳	大阪府	円墳		粘土槨	7			7
東の大塚古墳	大阪府	円墳	and a second	竪穴式石室		5	1	6

第1表 碧玉製腕飾類出土数量上位古墳

#### 3. 松岳山古墳と日葉酢媛陵

松岳山古墳および同群のもつ上記の特徴 3 点から松岳山古墳群の性格に触れてみたいと思う。まず石棺の前後に立てられている大形の有孔板石は夙に奈良県日葉酢媛陵に同種の板石が石室材の中に存在することが知られている(®)。日葉酢媛陵については明治12年の墳丘実測・大正 5 年の発掘復旧工事、そしてこれらの資料の一部が焼失、戦後になって梅原末治博士および和田千吉氏所蔵の同陵関係図面・写真が書陵部に提供されたという経緯を石田茂輔氏の「日葉酢媛命御陵の資料について」でのべている。日葉酢媛は『日本書紀』によると垂仁 5 年に起った狭穂彦王の乱で死亡した皇后狭穂媛のあと丹波国から入内した皇后である。この日葉酢媛陵については考古学上著名な石棺伝承がある。

『新撰姓氏録』 左京神別下 天孫

石作連 火明命六世孫建真利根命之後也。垂仁天皇御世。奉為皇后日葉酢媛命。作石 棺献之。仍賜姓石作大連公也。

この石作連氏の伝承は誇張された単なる氏族伝承と軽視されている感があるが、この伝承は 吟味する内容があるように思われる。伝日葉酢媛陵が確かに垂仁皇后の日葉酢媛の墳墓であるか の点は別として、大和政権にかかわる狭城盾列古墳群(西群)にあり築造時期も4世紀後半とし て認められている古墳である。東国などの一部遠隔の地を除いて、 4 世紀代における有力首長 層族の墳墓は竪穴式石室内に木棺を納める葬法が採用されている。大和政権内の伝天皇陵をは じめ皇親(\*)陵もまたこの方式が採用されているものと考えられるから、日葉酢媛陵に石棺を採用 したということは異例として印象づけられてきたものであろう。日葉酢媛の出身は丹波国と伝 えられているが、出身の旧丹波国(京都府与謝郡)には「長宣子孫内行花文鏡」ほか多量の鉄利 器の出土と花崗岩製の舟形石棺で知られる蛭子山古墳がある。硬質の花崗岩加工技術が示す丹 波国の勢力を背景とした日葉酢媛の棺を伝統的な木棺にかえて石作りとしたとする石作連氏の 伝承は、事実である面を一部に認めることのできる画期的葬法を実現した誇りであろう。この 石作連氏の主張する日葉酢媛の棺は『書陵部紀要』に拠る限りでは石棺は認められず、石田氏 も埋納棺については一切触れていない。これは大正5年時の発掘が陵墓であるという事情から 遺体埋納棺については敢えて記録を控えたものか、または通有の割竹形木棺ですでに腐朽し形 状を失っていたかのいずれかであろう。石田氏文および梅原博士図によると、まず埋葬主体部 の石室は地山上に築かれている。すなわち地山の平坦面に板状の石を敷き石室床面としている。 ついで石室長辺は床面に敷据えられた床石から若干の間隙をおいて板状小割石を積上げ壁面を つくる通有の形となっている。そして石室の短辺壁は大形の有孔板石を立てて壁とし、室を覆 う天井部は繩掛突起を造り出した5枚の板石を並列させたものとなり、そして全体を土で覆う ものである。石作連氏に伝承される石棺とはこの石室構築材に、従来の土床面に巨石材を板状 に加工したものを使用し、さらに石室短辺を有孔大形板材で閉塞するという石材使用工法を指 しているのかも知れない。石室・棺の用語と区分は、われわれが今日使用している学術上の用語であるから石作連氏としては正確な伝承と認めてよいようである。

松岳山古墳石棺の前後に立てられた 2 枚の有孔板石がこの日葉酢媛陵の石室短辺のそれに共通するところのあることと、使用上の相違については「河内松岳山古墳の調査」で詳しく述べられている。石田氏は「石室の前後には大阪府松岳山古墳の所謂碑石に類似した大板石を立てて側石とするなど、年代の下降するとされる古式古墳と共通点を持っている。……この石室は竪穴式石室から石棺に移行す過渡的な姿とも見られ、時期的には石棺の発生する直前のものと考えられる(10)」と松岳山古墳に先行する時期であることを述べている。さらにこの有孔板石については松岳山古墳の調査報告に拠って「両板石間の距離は、約8.5mで当陵の両大板石の間隔に近く、当陵の両大板石と同一に見てよい様に思われる」。として両墳に密接な関係の潜むことを示唆している。

#### 4. 武埴安彦の乱と河内青玉繋

松岳山古墳が日葉 酢媛 陵と有孔板石という他に例を見ない埋葬施設で繋り、築造時期も長 持形石棺出現の兆とする見解から日葉酢媛陵に短かい時間で続くものであることが察せられる。

有孔板石を具える松岳山古墳のいま一つの特徴となる長持形石棺についての詳細は同古墳の調査報告書で示されている。この松岳山古墳の石棺に近似する石棺として対比されるものの一つに京都府妙見山古墳<sup>(11)</sup>がある。この古墳の主体部はすでに消滅しているが大正9年・昭和22年・24年の3回に亘り京都大学による調査が行われている。組合式石棺と棺上に石室状空間を設けた稀な構築で注目される古墳である。この石棺の石材と使われかたが松岳山古墳のそれと類似するとして妙見山古墳の古代史上の位置づけを試みている説がある<sup>(12)</sup>が、妙見山古墳石棺における凝灰岩は松岳山古墳石棺のように両側部と両小口部に使用されていなかったかも知れない。同報告書によると「此ノ区域ノ中央部ニ東西ヲ主軸トシテ長大ナル凝灰岩ノ棺底ヲ置キ、切石四枚ヨリ成ル側壁ヲ立テテ」とある。

松岳山古墳の主体部構造のうち特殊な板石の孔が、方・円の違いこそあれ、いまだ他に類を見ない遺物であり、立てられた位置も間隔もともに日葉酢媛陵に近いことは、その使われ方に相違があるとしても、日葉酢媛陵の石室短辺閉塞石板の形骸化をそこに見ることができそうである。

古墳からみて親縁性のつよい両墳の一方に伝えられる日葉酢媛の時代は、三輪政権の発展期であったことを『日本書紀』の伝えの中に窺うことができる。この時期に狭隘な松岳山丘陵に日葉酢媛陵とのかかわりを示す松岳山古墳と、ほぼ同時期の小古墳が築かれた背景となる三輪政権内部の事情を『日本書紀』崇神10年条に見ることができる。

…武埴安彦と妻吾田媛と謀反逆、師を興して惣に至る。各道を分りて、夫は山背より、婦は

大阪より、共に入りて帝京を襲はむと欲す。時に五十狭芹彦を遣して吾田媛の師を撃たしめたまふ。即ち大阪に遮りて、皆大いに破りつ。吾田媛を殺して悉に其の軍卒を斬りつ… (日本古典文学大系)

この事件は崇神政権にとって最初の軍事的危機であった。皇位奪取を謀る武埴安彦は河内出 身の母を持つ人物となっている。

『日本書紀』 孝元七年条

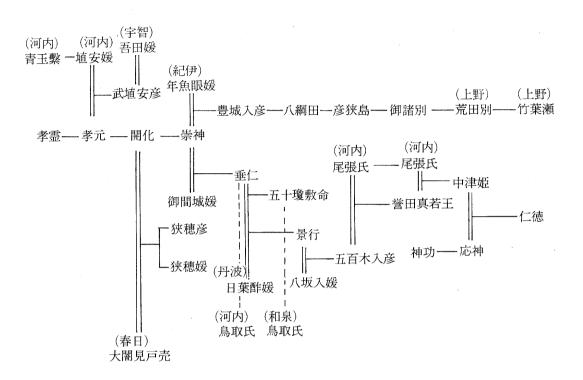
…次の妃河内の青玉繋が女埴安媛、武埴安彦命を生む…

『古事記』 孝元殷

…また河内の青玉の女、名は波邇夜須毘売を娶して生みませる御子、建波邇夜須毘古命… 武埴安彦が崇神天皇の伯父に当り、河内の青玉繋を祖父とする河内系の人物であったことが知られるが、大阪からの侵攻軍を指揮した武埴安彦の妻吾田媛については記すところがない。およそ

古代人名は地名(族名)を負うものであるから、吾田媛の出身地は次のように推察される。

『和名抄』に 大和国宇智郡阿陀郷がある。阿陀郷のある宇智郡は奈良盆地南の関門で、この 地には西山・丸山・近内鑵子塚・五条猫塚・青墓などの古墳によって古墳群(近内古墳群)が形 成された古い土地である。とくに奈良盆地にとっては紀の川文化との関係から要衝の地である。 阿陀郷は吉野川の左岸、和歌山県との県境に広がる水田地帯と考えられている。まず『大和史 料。・『地名辞書』は上流の現在の五条市東・西・南阿田町の3地区、そして式社阿田比売神社 を祀るこの地域を阿陀郷の旧地と考証しているが、明治9年『大日本全図』第1号は現在の五 条市野原町の一帯の水田地帯を阿陀郷としている。宇智郡にはこのほか賀美・那珂・資母郷を 載せるが、旧郷地の考証には各説があるようで定まっていない。いずれにせよ葛城氏の勢力圏 にあったこの地を吾田媛の出身地としてよいように思われる。奈良盆地南部から葛城地方に伝 えを遺す葛城系首長の血を引き、河内勢力を母方に持つ武埴安彦が盆地の南の要衝を扼す宇智 の阿陀族の女を娶り、政権奪取を実行した戦いで妻の吾田媛が河内青玉繋の軍事的援助を期待 したとしても決して不自然ではなかろう。侵攻地の大阪が松岳山古墳群のある柏原市国分町から 奈良県北葛城郡香芝町に通じる「関屋越」であることはすでに知られているところである。こ の乱の戦後処理についての記載はないが、何らかの形で武埴安彦や直接には吾田媛の軍事力に かかわりを持ったと思われる河内青玉繋への三輪政権からの影響には、かなり厳しいものがあ ったと想像される。謀反者、反抗者への懲罰として土地の取り上げ、また服従、謝罪の表現と して土地・財宝の貢譲はしばしばみられるところである(13)。武埴安彦の乱のあと三輪政権と河 内青玉繋との間で戦後処理について何らかの交渉があったとすれば、それは三輪政権の河内進 出と河内勢力との提携であろう。政権拡充期の崇神朝が河内への橋頭堡として、奈良盆地の西 の関門にのちの屯倉的性格の地を確保し河内進出の重要拠点として松岳山古墳群の地域を河内 青玉繋に求めたことを想定してみたい。新しい資料となるが『新撰姓氏録』に渡来系田辺氏の 始祖伝承で「諡皇極御世。賜河内山下田。」とあるのは、大化直前まで「河内山下田」、すなわち 松岳山古墳群のある柏原市国分本町(安宿郡資母郷)の地が天皇家領として伝えられてきたこと を示しているのであろう。



次に孝元天皇妃として埴安媛を出した河内青玉繋は『記・紀』に媛の父として一度その名を見るのみである。青玉繋の名で記憶された河内の豪族が実在したとすれば、それは大和政権にとっては、河内勢力の中にあって政治的・軍事的そして地理的にも重要な地位を占める勢力として捉えられていたと思われる。『記』は青玉の名で呼ぶが、青玉繋が「石製玉類」の製作集団名に因む族長の呼称であれば、大和川が生駒・金剛の山峡を河内に出た地にそれを考える若干の資料がある。まず『和名抄』は河内国高安郡に玉祖郷を載せている。生駒山地の南の小峰・高安山の西麓がその遺称地とされる(14)。山麓は扇状台地がよく開け縄文・弥生時代からの集落跡が点在する。この地でとくに注意されるのは古墳時代を中心に攻玉の行われた形跡のあることである(15)。ここに玉類製作の集落工房があったとすれば、その集団が祖神を奉祀した氏神もまた郷名とともにこの地に伝えられている。『延喜式神名帳』の玉祖神社である。

『延喜式神名帳』 河内国高安郡 玉祖神社 (祭神・櫛明玉命)

『新撰姓氏録』 河内国神別 天神 玉祖宿祢 天高御魂乃命十三世孫建荒木命之後也 高安郡玉祖郷の名が青玉繋との縁由を伝えるものかについては以上であるが、玉祖郷には前 期古墳の西山・花岡山・向山の3基の前方後円墳と竜山凝灰岩を使用した長持形石棺を埋納主体とする前方後円墳の心合寺山古墳(史跡)の古墳群がある。河内平野の東部、生駒山西麓扇状地帯に認められる唯一の前・中期古墳群である。次は柏原市国分田辺町(安宿郡資母郷)から攻玉砥の出土が報ぜられている<sup>(16)</sup>。報告書によると研磨面を持つもの1点、研磨溝3条を遺すもの1点、ほか数点の砥石片を認めている。この攻玉遺物の出土地一帯については7世紀に降るがこの地に関連する次のような資料がある。それは松岳山古墳群の所在する国分本町の大和川を隔てた対岸は旧河内国大県郡の鳥取・鳥坂の2郷となっていて、神別氏族鳥取連氏の本貫であった。鳥取氏がこの地に本貫を置くについては後述するが、同市高井田町に鳥取氏の氏寺であった鳥坂寺跡がある。昭和37年の発掘調査で「玉作部 飛鳥評」と箆書銘のある平瓦の出土があった<sup>(17)</sup>。旧安宿郡内に玉作部を称する集団のあったことを物語っている。この部が河内青玉繋の4世紀にまで溯るかは不明であるが、田辺町の攻玉砥の出土とともに青玉繋が三輪政権に松岳山古墳群の地一帯を貢譲しただろうとする推察を援けるものとなる。

崇神朝期の武埴安彦の乱につづいて次の垂仁朝初期に皇位をめぐる内紛が伝えられている。

『日本書紀』垂仁天皇五年条に記れた狭穂彦王の謀反である。この乱 は皇后狭穂媛、皇子誉 津別命を巻きこむ悲劇が伝えられているが、垂仁朝にとっては政権を固めるための試練であっ たこの内紛で垂仁天皇を援けた将軍として豊城入彦の子の八網田がある。「…即ち近県の卒を発 して、上毛野君の遠祖八網田に命せて、狭穂彦を撃たしめたまふ。……狭穂彦妹と共に城の中 に死りぬ。天皇是に将軍八網田の功を美めたまひて、其の名を号けて倭日向武日向彦八網田と 謂ふ。」。天皇にとっては最も信頼した皇親であり、三輪政権の軍事力を統帥する将軍の地位に あったことが察せられる。つづいて垂仁天皇23年条に松岳山古墳群の地域が、青玉繋から貢譲 され、三輪政権の対河内政策の拠点となったかを想定させる記載がある。それは垂仁天皇第一 皇子として掲げている誉津別皇子 に関するもので、「もの言わぬ皇子と鵠 (大白鳥) と鳥取氏」 の説話である。この説話は『新撰姓氏録』 右京神別上 天神 鳥取連 の項にも氏族の名誉 譚として述べられている。すなわち「成人してもなお、もの言わぬ皇子のために鳥取氏の祖、 湯河板挙が鵠を捕え、これによって皇子がもの言うことを得た。」と語りこの功績によって鳥取 造の姓を賜ったというものである。誉津別皇子をめぐる説話には多くの論説があり、鳥取氏に ついても若干の研究がなされているが、本稿では鳥取氏と河内についての要点のみにとどめる。 鳥取氏はさきの鳥坂寺で触れたように、松岳山古墳群とは大和川を隔てた大県郡鳥取郷・鳥坂 郷の両郷を本貫とし、氏族の始祖・湯河板挙を祀る式内社天湯川田神社もあって同族の諸国に 分布する大族である。この名誉ある鳥取氏が山峡の全く耕地を持たない両郷の地になぜ定住したか の疑問がある。8世紀奈良時代は平城宮と難波宮を結ぶ主街道の一つ「竜田路」の地ではあっ たが、鳥取氏の両郷定着はもちろん七世紀中葉以前であることは氏寺たる鳥坂寺跡の発掘調査 で明らかである。ここで起想されるのが松岳山古墳群を含む三輪政権の河内における拠点とな

った地域の範囲である。すなわち大和川が河内平野に流れ出た地点の両岸一帯を指している。 天皇家の悩みであった第一皇子を救った信頼できる鳥取氏を河内の拠点の一画に出向させ関門 を固めたのであろうことが想定される。これを補うものとして鳥取氏の河内進出定住を想わせ ることがある。それは垂仁天皇と日葉酢媛皇后との第一皇子五十瓊敷入彦命の伝えである。

『日本書紀』 垂仁天皇三十九年条

五十瓊敷命、茅渟の菟砥川上宮に居まして、剱一千口を作る。……

『古事記』 垂仁天皇叚

印色入日子命は、…また鳥取の河上宮に坐して、横刀一千口を作らしめ、これを石上神宮 に納め奉り、すなわちその宮に坐して、河上部を定めたまひき。……

五十瓊敷命の宮の所在地「菟砥・鳥取」は『和名抄』和泉国日根郡鳥取郷が遺称地とされている<sup>(18)</sup>。この和泉にも湯河板挙の親縁者が定住している。崇峻前紀に著名な蘇我氏と物部氏の政争を伝えるが、この記事に物部大連守屋の資人として「捕鳥萬」の名が見える。大連守屋に殉じ本貫地で勇戦し自ら命を断つが、この捕鳥萬に代表される鳥取氏は皇子五十瓊敷命と共に三輪政権の持つ河内の泉南の地にも皇子とともに進出し定住したものと思われる。

このような三輪政権の充実期にあって対河内の拠点と目される地に、伝日葉酢媛陵内部主体の特徴を継承する唯一の松岳山古墳の被葬者は、垂仁朝期にあって天皇および皇后日葉酢媛から絶対的信頼をうけた皇親の一人であろう。そしてその人物こそ三輪政権にとって最も重要な河内の拠点に葬られるに応しいものであった。そして松岳山古墳群が4世紀から5世紀初頭という短期間に限られた築造で終焉し、他の地に墓域を遷した事情を皇親系譜に求めると、それは垂仁天皇の異母兄豊城入彦の系脈が挙げられるようである。

#### 5. 豊城命と毛野国

『日本書紀』 崇神天皇四十八年条

天皇、豊城命、活目尊に勅して曰く、汝等二子慈愛共に斉し。曷れを嗣に為むことを知らず。各宣しく夢みるべし。……會明に兄豊城命夢の辞を以て天皇に奏して曰さく、自ら御諸山の嶺に登りて、東に向いて八廻撃刀す。……夏四月戊申朔丙寅、活目尊を立てて皇太子と為たまふ。豊城命を以て東国を治めしむ。是れ上毛野君、下毛野君等の始祖なり。

豊城命およびその系流の毛野国進出についての研究の一つに前沢輝政氏の『毛野国の研究<sup>(19)</sup>』がある。上・下毛野国における古墳時代の研究である。前沢氏は毛野国の古墳時代を「揺籃期」・「成立期」・「発展期」に三区分し、揺籃期・成立期を古墳時代前期に、発展期を古墳時代中期としている。この古墳の変遷と毛野国の伝承とを対応させ、畿内大和政権とのかかわりに及んでいる。以下の毛野国にある古墳については前沢氏の『毛野国の研究』に収められた資料によるものである。

まず前沢氏が揺籃期に位置づけた古墳 6 基についてみると、丹彩壺形土器の供献、副葬鏡 1 5面、このうち舶載鏡12面、そしてこのうち三角縁鏡 7 面 (同笵鏡を含む)と豊かな内容を示している。しかし埋葬主体施設は 1 例(20)を除いて粘土槨で墳形は径40mまでの円墳である。この揺籃期古墳の副葬鏡について前沢氏は古墳発生以前に畿内大和から運ばれ、伝世されたものであり、魏晋鏡については大和政権との政治関係によって賜与されたものであろうとし、そしてこの年代を 4 世紀前半ないし中葉に考えている。

つづいて前期成立期の古墳は前代の円墳という墳形を遺しながら主流は前方後円、前方後方という墳形に変化を示す。しかし埋葬主体施設は粘土槨という域から脱し得ないようである。また古墳の規模も70m前後で突出した規模の首長墓の出現は見られない。副葬品などについては畿内大和の先進性に積極的であるが埋葬は在地的で政治組織の大きな変革を示す大和的古墳の出現は次の発展期とする5世紀をまたねばならないようである。

前沢氏は毛野国の古墳の整理を通じて畿内大和政権の政治的影響と支配組織を太田天神山古墳(群馬県太田市)の長持形石棺と全長約210mという前方後円墳の出現にみている。そしてこの古墳の被葬者を上述の豊城命の系流上にある人物とし、『日本書紀』における荒田別の朝鮮出兵記事から太田天神山古墳を荒田別の墳に想定している。そして築造時期は長持形石棺や朝鮮関係記事から4世紀末から5世紀初頭とした。このほか全長約220mを測る雷電山古墳なども豊城命系皇親墓の一つとみている。それは『記・紀』をはじめ『国造本紀』、『新撰姓氏録』に伝えられている毛野国と豊城命系皇親の動向、さらに『宋書』に見える倭国の諸将軍記事の中に大和王権を支えた地方首長の姿を認め、この中に毛野国の首長も含まれていると思われるし、さらに「神功紀・応神紀」には明らかに荒田別・鹿我別という毛野国の皇親首長名の活躍が認められるからであるとする。



# 『日本書紀』 景行天皇五十五年条

彦狭島王を以て東山道十五国の都督に拝けたまふ。是れ豊城命の孫なり。然るに春日穴咋 邑に到りて、病に臥して薨りぬ。是時東国の百姓其の王の至らざるを悲みて、ひそかに王 の屍を盗みて上野国に葬りぬ。

### 同天皇五十六年条

御諸別王に詔して曰く、汝の父彦狭島王、任所に向るこを得ずして早く薨りぬ。故れ汝専 ら東国を領めよ。是を以て御諸別王、天皇の命を承りて、且た父の業を成さむと欲ふ。則 ち行きて治めて早に善き政を得つ。……是に由りて其の子孫今に東国に在り。……

神功皇后四十九年条

荒田別、鹿我別を以て将軍と為し、則ち久氐等と共に兵を勒えて度る。卓淳国に至り、将 に新羅を襲はむとす。……五十年春二月、荒田別等還る。

#### 応神天皇十五年条

天皇阿直岐に問ひて曰く、如し汝に勝れる博士亦有りや。對えて曰く、王仁という者有り、 是れ秀れたり。時に上毛野君の祖荒田別、巫別を百済に遺して、仍りて王仁を徴さしむ。 其の阿直岐は阿直岐史の始祖なり。

#### 仁徳天皇五十三年条

新羅朝貢らず。夏五月、上毛野君の祖竹葉瀬を遺して其の闕貢を問はしむ。……俄くありて重ねて竹瀬が弟田道を遣して則ち詔りてて曰く、若し新羅距がば兵を挙げて撃て。仍りて精兵を授けたまふ。……是に田道精騎を連ねて其の左を撃つ。新羅の軍潰れぬ。因りて兵を縦ちて乗みて、数百人を殺しぬ。即ち四邑の人民を虜へ以て帰る。

以上が『日本書紀』に記された豊城命系流の毛野国赴任の時期と、朝鮮出兵時の皇親総将軍 荒田別ほかの活躍の記録である。垂仁朝の八網田以来豊城命系は各政権の軍事を担当した皇親 氏族であったことがわかる。

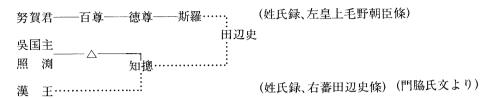
三輪政権から河内の巨大墳を遺した政権との間には、複雑な皇統上の経緯のあったことが研究されているが、豊城命系の人物に限ってみれば、いずれの政権からも絶対的な信頼をうけていることは注目されるところである。

## 6. 田辺史氏

松岳山古墳群の所在する地域が奈良時代の安宿郡資母郷であろうことはすでに確かである。 そしてこの郷には河内国分僧・尼寺が建てられており、平城京期を通じ、主要路(竜田路)に接する先進地であったこともひろく知られているところである。

渡来氏族の一つ、田辺氏はまさにこの中枢に氏寺を持ち松岳山古墳群を含めて氏地としていた氏族である。そしてこの資母郷の地は大和川を隔てた北の大県郡鳥取郷・鳥坂郷とともに、崇神朝の武埴安彦の乱に際し、河内の青玉繋から三輪政権に貢譲され、爾来天皇家の屯倉的直轄地として伝えられて来た地域であろうことを想定した。それはこの資母郷も大和川対岸にあって鳥取氏の管掌する鳥取・鳥坂の両郷もともに耕地は皆無に等しく、農業生産の面では無価値に近いものである。しかしながら政治・軍事の点では大和川をとり込むこの地が三輪の政権にとっては極めて重要であった。それだけに松岳山古墳に葬られた被葬者は三輪政権の重要人物であり、被葬者集団の性格もいずれかの形で伝承されていたものと考えられる。

田辺氏は早くから研究の対象となっている氏族である。大宝律令の撰修をはじめ藤原不比等 とのつながり、そして皇別氏族上毛野氏との氏族的かかわりなど氏族としてはかなり複雑な背 景を持っているようである。中でも雄略九年秋七月紀にある田辺史伯孫の替馬説話は有名である。このような事蹟の豊かな田辺氏の朝鮮からの渡来の時期や本貫地などについて若干の錯誤がみられるようである。



まず門脇禎二氏は『田辺廃寺跡発掘調査概要(21)』において田辺史族の略系譜を掲げ二つの始 祖伝承のあることを示した。そして『新撰姓氏録』にいう「謚皇極御世。賜河内山下田。以解 文書。為田辺史。」に注目し、皇極朝に田辺史氏が古市古墳群のある地域ないしは石川流域の不 安定な土地から、現在の田辺の地の下賜をうけたのを機とし、さらに下級官人として出発した のであろうとした。門脇氏が古市古墳群の地域や石川流域に田辺氏の旧地を想定した理由は明 らかでないが、これらの説の根幹となる田辺史氏の系譜の解釈に疑問点がみられる。それは呉 国主照渕の孫知摠にはじまる系流が努賀君系の斯羅に系入していることである。この錯綜につ いては「幾つかの諸氏とともに百済系の渡来氏族との同祖系譜をつくりながら」としているが、 この二系流は各々独立した系譜であろうと思われる。このことについて今井啓一氏は『続日本 紀研究(22)』において『新撰姓氏録』(左京諸蕃下・右京諸蕃上)の和薬使主・田辺史氏祖の智總 が欽明23年の大伴狭手彦連の朝鮮出兵を機に渡来したのであろうと考えた。しかし一方では雄 略紀の田辺史伯孫と『新撰姓氏録』の百尊・斯羅系のあることに注目しているが、この両系に ついては論ずるところがない。志田諄一氏は『日本上古史研究(23)』で雄略紀の伯孫説話は「文 撰の顔延之赫白馬賦」によるものであることを述べ、次に『新撰姓氏録』に及んで「田辺氏は 河内の屯倉の田部の戸籍を作成するのに関係したので、田部史の姓を賜ったのが舒明紀元年夏 四月辛朔の条などに見える田部連と混同する恐れがあるので田辺史としたのではないかと考え られる」。さらに「皇極朝に河内に田を賜った田辺氏の本貫は河内ではなく、大化後摂津に移貫 したのであろう」と田辺氏を一系流で論じている。また滝川政次郎氏は『日本上古史研究(24)』 において田辺史氏に対する次のような資料の扱いがある。

#### 田辺史は 新撰姓氏録 右京情蕃に

田辺史。出自漢王之後知摠也。大泊瀬幼武天皇(謚雄略)御世。努賀君男百尊。摠聞女産 兒往賀聟家。犯夜而帰。……略。

これは『新撰姓氏録』(左京皇別下)の上毛野朝臣氏に語られた努賀君にはじまる田辺史氏の 伝承と「右京諸蕃上の呉国主照渕」を始祖とし、知摠にはじまる田辺史氏を混記したもので、 滝川氏は田辺氏系流は一本という前提で記されたものと思われる。そして「田辺史には上毛野 君の姓を賜ったものもあるが」と、右京に貫した田辺史氏の一系を考えている。門脇氏は『新 撰姓氏録』に登載された右京諸蕃上の田辺史氏と左京皇別下の上毛野朝臣系の田辺史氏の二系の始祖伝承こそが田辺史氏の祖先を解明する手掛りとなる内容をもっている。とされながら田辺史氏は一系流と考えているようである。

田辺氏に二系流あることを思わせるものに系譜にみられる始祖の違いだけでなく次のような資料に注意されるところがある。滝川政次郎氏が「田辺史の郷里は摂津国百済郡であったと思う」、そして『三代実録』貞観四年条の「摂津国正六位上田辺東神。田辺西神。並授従五位下」および天平五年右京計帳の「摂津国住吉郡田辺郷戸主正七位上田辺史真立」を引いて田辺史氏の本貫を摂津国とし、雄略紀の田辺史伯孫替馬説話の舞台を河内国古市と摂津国住吉郡にあてている。『大阪府全志』は摂津田辺町大字南田辺村の項で「本地は古来百済郡に属せしが後闕郡となり後住吉郡に入れり。もと百済郡に於ける南部郷にして南田辺村と称す。旧郷名は和名抄に百済郡南部郷と見ゆるもの是にして……」と説明し『摂津誌』の「南部、己廃為住吉郡南田辺、延喜式曰、凡諸国部内郡里等名並用二字、必取喜名、故源順省田字爾」から「郷名は田の字を省きたるものにして、……南部郷のみならず旧百済郡に於ける東部郷及び西部郷も共に田の字を省きたるものなるべし。」と摂津国百済郡三郷(東部・南部・西部)を解している。これによると摂津国百済郡は百済国からの渡来氏族、田辺氏によって建てられている郡ということになる。『大阪府の地名(25)』は北田辺村・南田辺村の項に「古代住吉郡田辺郷(和名抄)」としているが、『和名抄』に住吉郡田辺郷は見えない。このほか摂津国田辺郷について若干の資料を見るが、ほぼ以上に代表される内容である。

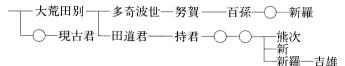
以上のように田辺氏は摂津国と河内国の二国に居住していることがわかる。そして各々の田辺氏は氏寺を持つ独立氏族のように思われる。すなわち河内田辺氏は安宿郡資母郷の地に田辺廃寺の名で呼ばれる寺を持ち、一方摂津田辺氏もまた摂津田辺寺の名で知られた寺を建てていた。摂津田辺寺研究は古く、高橋直一『考古学雑誌』11の10・12の12「古瓦雑録」につづいて、大正15年山本加三『考古学雑誌』16の4「北田辺の一廃寺址に就いて、其一」がある。昭和16年この寺跡に摂津田辺寺の名称を付し出土古瓦の編年分類をした藤澤一夫氏は同寺跡出土の創建期瓦を「摂河泉出土古瓦様式分類の一試企(26)」において「第二期類複弁紋系類 海会寺式亜式一摂津田辺寺式」として奈良時代前期屋瓦編年の基本資料の一つとした。藤澤氏が『田辺廃寺跡発掘調査概要』(「第六章河内田辺廃寺の屋瓦」)で「この氏族は文献的にも幾つかの系流が考えられ、摂津田辺史も夙に田辺寺を建立している」とする寺に当るものである。以上のように田辺史氏は摂津国と河内国に各々氏寺を建てた二系流のあったことがわかる。基幹氏族が日本への渡来後、幾流かに分脈し各々が異った氏族名を唱え独立して氏寺を持つ例は多い。奈良時代を通じ中央・地方を問わず活躍した氏族の寺が藤原京期前後の創建であるように、摂津・河内の両田辺氏もまた寺跡出土遺瓦から天武・持統朝とされるものである。ここで注意されるのは両寺の創建期軒丸瓦瓦当文が摂津田辺寺のそれは大和の官立諸寺から地方に広がる系譜上

にある一つで、さらに同時期の瓦当には法隆寺のそれに極めて近いものがあって、この寺の檀越氏族たる摂津田辺氏の族性の一端を窺う好資料となるものである。これに対し河内田辺寺の場合は特徴のある瓦当文を創建期瓦としている。同策と目される瓦当は河内田辺寺に隣接する原山廃寺・五十村廃寺・安宿大寺(以上柏原市国分地区)の3箇所以外では現在のところ讃岐国開法寺(27)にみられるのを唯一とする。

さて大宝律令の撰修をはじめ文籍をもって著名な田辺史氏を摂津田辺氏系とするか河内田辺 氏系とするかという新しい疑問が生じる。さきの天平七年右京計帳の田辺史真立は間違いなく 摂津田辺氏であろうが、これらの問題は田辺氏研究の将来への課題となろう。

このように田辺史氏には二系流があり、各々が寺塔を建立したという事実が認められる以上、さきの『新撰姓氏録』右京諸蕃上の田辺氏と左京皇別下の上毛野朝臣氏系田辺氏の検討が必要となる。まず河内田辺氏については雄略紀の伯孫説話(28)が重要となる。この「飛鳥戸郡の人田辺史伯孫」は後世の作為によるものであることは、すでに多くの先学によって指摘されているところであるが、『新撰姓氏録』からみる伯孫(百孫)は皇極朝に河内山下の田を賜ったと伝える斯羅からは祖父の世代に当り、およそ6世紀半ばということとなる。この時期にはまだ摂津という国名は存在せずすべて河内国であったから、滝川説の摂津から古市に出向いたとする見解も妥当となろう。少なくともこの説話作成時に伯孫を飛鳥戸郡の人とした田辺氏は、河内国飛鳥戸(安宿)郡に住む田辺氏であっただろうから、伯孫なる人物が河内田辺氏系流の一人であったとしてよいだろう。

伯孫を河内田辺氏の系流に位置づけたが『日本書紀』・『新撰姓氏録』にいう雄略朝期の人物とすることは孫の世代の斯羅から逆算すると無理があるようである。伯孫の父に当る努賀君の系譜について大塚徳郎氏は『平安初期政治史研究(29)』で次のような譜図を作成している。



『新撰姓氏録』の記載は「上毛野朝臣 下毛野朝臣同租。豊城入彦命五世孫多奇波世君之後 也。大泊瀬幼武天皇謚雄略御世。努賀君男百尊…」とあって多奇波世君と努賀君とは親子の関 係では示されていない。すなわち河内田辺氏は伯孫の父努賀君から起る譜図である。努賀君以 前については何ら伝えるところがない。108頁で示した豊城命系譜のとおり『日本書紀』は竹葉 瀬を仁徳紀に登場させている。仮りに伯孫を雄略朝期にあてたとしても仁徳朝期との年の間が 努賀君一代では不合理であろう。この上毛野朝臣氏を仮冒する河内田辺氏は同氏が伝えた正確 な始祖と累祖名を『姓氏録』撰述の時に作為的に努賀君で抹消したものであろう。

神功紀四十九年条に豊城命五世孫、荒田別・鹿我別を将軍とする朝鮮半島出兵が語られている。この出兵記事の信憑性については6世紀の史実の反映とするものと、4世紀後半の朝鮮半

島情勢から百済記に基づく記事で史実であるとする二説があるが、荒田別・鹿我別に従って渡来したと思われるものに、上毛野朝臣と同祖関係を主張する摂津皇別氏族がある。

『新撰姓氏録』 摂津国皇別 韓矢田部造

上毛野朝臣同祖。豊城入彦命之後也。三世孫弥母里別命孫現古君。気長足比売謚神功……韓矢田部造は摂津田辺氏の本貫、住吉郡の南1kmの旧丹北郡(現大阪市東住吉区矢田矢田部町)を居地とする氏族である。この韓矢田部氏は距離的に見ても摂津田辺氏と同族ないしは擬制同族としてよいものである。つづいて応神紀十五年条に「時に上毛野君の祖、荒田別、巫別を百済に遣して、仍りて王仁を徴さしむ。」と同十四年の弓月君、十五年の阿直岐につづく王仁の渡来を伝える。この王仁の子孫の一つが伯孫伝説にある古市郡書首である。以上のように応神紀で多くの名族の渡来を伝えるが後世上毛野朝臣族を唱える氏族の同伴渡来があったかは明らかでない。次に仁徳紀五十三年条に竹葉瀬とその弟田道の朝鮮半島出兵がある。この兄弟に従って渡来したと称する田辺氏系の氏族がある。

『弘仁私記・序・諸蕃雑姓記・注』

田辺史、上毛野公、池原朝臣、住吉朝臣等祖、思須美和徳両人、大鷦鷯天皇御宇之時、自 百済国化来、而言、己等祖是貴国将軍上毛野公竹合也、……。

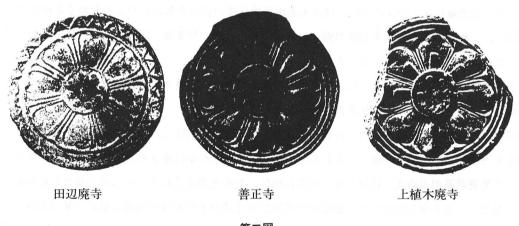
この『諸蕃雑姓記』の注については渡来系田辺史氏族の朝臣を仮冒したことをめぐる所論<sup>(30)</sup>の如く、これらの氏が思須美和徳の両人の末裔であること、竹葉瀬、田道両将軍に従って渡したことが事実であるという主張であろう。

田辺史氏と同族の池原朝臣・住吉朝臣は共に摂津住吉郡を本貫とする氏族であろう。神功紀 の韓矢田部造と同様に摂津国住吉郡域に居住したようである。

河内田辺史氏の系譜で努賀君・百尊・徳尊の三代は摂津に居住したものであったか、もしくは渡来当初から河内山下の地、すなわち河内田辺に定住したかは確かめ得ない。しかしこれについて努賀君系田辺史氏が摂津でなく河内に居住したかと想定される一・二の可能性を採りあげて見たい。先も少し触れたが、松岳山の丘陵に続く国分本町丘陵と田辺丘陵に三基の古墳が築かれていたことが判っている。(第一図)このうち国分中学校々地に二基の円筒埴輪を巡らす古墳があった。埴輪から推定される古墳は5世紀後半と6世紀前半に編年されるものである。古墳は昭和20年代にすでに失われ、墳丘規模や墳形、主体部、出土遺物など全く不明であるが、その一つに使われていた円墳埴輪(第一図)は大形で焼成も堅緻な優品である。この埴輪と旧地形から推察される古墳は前方部を西に向ける前方後円墳であろう。さらに田辺廃寺の西に伯孫の塚と呼ばれている古墳の一部が遺っている。南に口を開く横穴式石室を主体とするものである。これらの古墳が渡来氏族田辺氏の築いた古墳か否かは徴すべき資料は全くないがそれは田辺氏に限らず古墳時代と設定した期間に築かれたすべての墳墓の中に確かな渡来氏族墓を証徴し得ない現状の中にある。さきに神功・仁徳朝の渡来氏族のうち、田辺氏族が摂津住吉郡

域に居住したことをのべた。この住吉郡にかつて田辺古墳郡<sup>(31)</sup>と呼ばれた古墳群があった。この小古墳群の実態は明らかでないが神功・仁徳紀以来の田辺氏族の墳墓が含まれている可能性をあげておきたい。

河内田辺氏が安宿郡資母郷の地域に定住するのが上記の古墳の時代に溯るか、『新撰姓氏録』の皇極朝であるのかいずれとも言えない。しかし崇神朝期に河内進出の拠点を確保し、豊城命系皇親墓を築いたこの三輪政権直轄の地に、大陸文物の摂取に積極的であった河内政権の親縁氏族の豊城命系氏族が、文籍に明るい田辺氏の一流を資人として組織に編入したこともあり得ることである。従って河内山下田が大化前代における土地制度からみて天皇家の屯倉的直割地であった経過から、田辺斯羅が皇極朝にこの地の下賜をうけたとする伝承が理解できる。そして豊城命系皇親墓の伝承を持つ松岳山古墳群を介して上毛野朝臣の仮冒が実現した一端をこの地に見ることができる。また毛野国の直接支配期に入ってからの荒田別をはじめ鹿我別・竹葉瀬・田道などの半島出兵は東国からの直接出陣ではなく畿内における軍団の編成であろうから、河内山下の直割地や、摂津住吉の地はこのような畿内滞在期間の面でも豊城命族にとっては重要な意味を持つ地であったと思われる。



第二区

7世紀に入り毛野国でもいち早く天智朝期に山王廃寺(前橋市総社町)が建てられる。つづいて伊勢崎市上植木町に上植木廃寺の建立をみる。この上植木廃寺の檀越氏族については確かな資料に接しないが使用されている屋瓦に注目されるものがある(第二図)。この瓦は『飛鳥・白鳳の古瓦(32)』で4種が紹介され山田寺式に編類されている。このうち一例だけであるが(146)号瓦は(142・143)号の大阪・善正寺出土瓦に酷似するものである。弁縁を際立つ細線で縁取りし、各弁間に鋭い区画線を納れる特徴のある瓦で同式類では他に例を見ないものである。大阪・善正寺は夙に渡来氏族船氏にかかわる寺として著名である。この上植木廃寺・善正寺例に極めて

類似する屋瓦の使用が河内田辺廃寺ほかにみられる。これは使用例の極めて限定された軒丸瓦 で周縁・子葉弁の意匠に違いはあるが、弁縁を細線で縁取りし弁間に区画線を強く納める手法 は、式類別の上からは確かに区分されるものではあっても両者の間には無視できない共通点を 見出すことができ、河内田辺史氏と毛野国との濃密な関係の一面を想定させる一例となろう。

#### 7. あとがき

松岳山古墳と群の古代史上の位置づけは周辺の前期古墳も含めた河内の古墳そのものの研究から出発することは言うまでもない。5世紀に入って河内平野に出現する古市・百舌の巨大古墳群が倭の統一を示す記念物であることも確かである。この統一という支配形態が大化後のそれと異なる政治形態であったとしても、漢、韓に例をひくまでもなく統一政権の樹立された姿として理解されることはいうまでもないところであろう。これら大王墓と呼ぶ巨大墳出現の背景には豊城命系譜に見られるような勇猛な皇親将軍の活躍が統一をすすめ実現させた原動力であった。景行紀に伝えられる「日本武尊」の説話はまさに豊城命系の八網田・彦狭島にはじまる荒田別・鹿我別・竹葉瀬・田道ら皇親将軍活躍の投影であろう。

日葉酢媛陵については『記・紀』『延喜諸陵寮式』に伝えられるだけでなく『菅家御伝記』にもまた被葬者と墓所の所在がのべられていて、少なくとも「諸陵寮式」の撰せられた平安時代初期は確かな陵墓伝承があったものと思われる。同様に各氏族にあっても各々の始祖伝承や累代墳墓の地についても正確に伝えられているようである。『日本後紀』 桓武天皇延暦十八年条に「正四位下行左大弁兼右衛士督皇太子学士伊勢守菅野朝臣眞道等言、己等先祖葛井、船、津、三氏墓地、在河内国丹比郡野中寺以南、名曰寺山、子孫相守、累世不侵、而今樵夫成市、採伐家樹、先祖幽魂、永失所帰、伏請依旧令禁、許之、」や、『三代実録』 陽成天皇元慶三年条に「河内国高安郡人常陸權少目従八位上常澄宿祢秋雄。……賜姓高安宿祢。秋雄等自言。先祖。後漢光武皇帝。孝章皇帝之後也。裔孫高安公陽倍。天万豊日天皇御世立高安郡。……望請改八戸常澄両姓。復本姓高安也。」のごとく父祖の瑩地や氏祖伝承は官省においても基本的には信頼できるものとして認めている好例の一つである。

松岳山古墳群が豊城命系の墳墓であることの伝えは文献および伝承を持たないが、武埴安彦の乱と河内青玉繋さらに鳥取氏の河内本貫を併せ考えると上述の経緯が想定され、また河内田辺史氏が上毛野朝臣を仮冒する由縁の一つに三輪政権以来の河内の拠点、のちの河内山下田を領した田辺史氏家に松岳山古墳群の被葬者伝承が継がれていたものであろうことを想定した。それは河内田辺史氏が、中央政界で律令撰修にはじまる活躍をした系流でなく、豊城命系の毛野国に出向いた皇親、上毛野公族の文籍資人として共にあったことと相携える伝承と思われる。

江戸時代以来の船氏の墓誌と松岳山については群とは直接関係をもたないものと考え別稿の 機会を待ちたいと思っている。 註

- 1.『河内松岳山古墳の調査』序記で藤貞幹説がくわしく述べられている。
- 2. 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯 昭和9年 『考古学雑誌』39の1 昭和28年
- 3. 北野耕平「国分ヌク谷北塚古墳」(『河内における古墳の調査』) 1964
- 4 『柏原市所在遺跡発掘調査概報』柏原市文化文化財報告 1982 ₩
- 5 斉藤 忠「松岳山古墳に関する二、三の考察」(『古代学』16の2、3、4) 昭和44年
- 6. 文献名を省略するが、古市古墳成立についての論考は多い。要約すると考古学からの説は松岳山古墳群から古市古墳に成長したとするもの松岳山古墳群と玉手山古墳群との連合勢力によるものに二大別される。また古市古墳中の古式古墳を意識して関連づけようとする考えもあるようである。
- 7. 『河内松岳山古墳の調査』で用途・機能の考察が述べられている。
- 8. 石田茂輔「日葉酢媛命陵の資料について」(『書陵部紀要』第19号所収) 昭和42年 『書陵部紀要所収陵墓関係論文集』
- 9. 皇親の名称は前掲(3)における北野耕平氏の用語・語意をそのまま使用した。
- 10. 前掲(8)
- 11. 『京都府史蹟名勝天然記念物調查報告』第三冊 大正11年
- 12. 間壁忠彦・間壁葭子『吉備古代史の未知を解く』II・石の軌跡 昭和56年
- 13. 時期は降るが「雄略紀」の志紀大県主・「清寧前紀」の「天皇即ち使を遺して、上道臣等を嘖譚めて其の領むる山部を奪ひたまふ。」
- 14. 『八尾市史・大阪府全志・中河内郡誌』ほか
- 15. 『大阪文化誌』第6号 1976、大阪府教育委員会『水越遺跡説明会資料』昭和53年
- 16. 『柏原市所在遺跡発掘調査概報』柏原市文化財報告1982-WⅡ 1983
- 17. 『河内高井田・鳥坂寺跡』大阪府文化財調査報告 第19輯 1968
- 18. 吉田東吾『地名辞書』・『東鳥取村誌』ほか
- 19. 前沢輝政『毛野国の研究』 1982
- 20. 本郷大塚古墳(群馬郡榛名町本郷)円礫による竪穴式石室
- 21. 『田辺廃寺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要1971-2 1972
- 22. 『続日本紀研究』8-12 昭和36年
- 23. 『日本上古史研究』 3-4(28) 昭和34年
- 24. 『日本上古史研究』 5 -11(59) 昭和36年
- 25. 平凡社『大阪府の地名』日本歴史地名大系28 1986
- 26. 『仏教考古学論叢』考古学評論第三輯 昭和16年

- 27. 藤井直正「讃岐開法寺考」(『史跡と美術』第485) 昭和53年
- 28. 『日本書紀』 雄略天皇九年秋七月壬辰朔条
- 29. 『平安政治史研究』 昭和53年
- 30. 大和岩雄「『弘仁私記』序考」(『日本書紀研究』第9冊) 昭和51年
- 31. 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯 大阪府下に於ける主要な古墳墓の調査(其の一) 昭和7年・堀田啓一「大阪の考古学」(『大阪の歴史』所収)昭和54年
- 32. 『飛鳥・白鳳の古瓦』 昭和57年

# 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1985年

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和61年3月31日

印 刷 サンケイ総合印刷株式会社